

彙報

二〇二二年四月より
二〇二三年三月まで

研究狀況（二〇二二年度）

公募型研究班

清代～近代における經學の斷絶と連續…目錄學の視角から
班長 竹元規人

定例の研究會においては、一通り完成した『文史通義』内篇譯注について、全體を見直して再検討を加えるとともに、章學誠の學術構想を通して古代から近代に至る中國學術史を俯瞰する研究論集『章學誠の可能性』の刊行に向けた、班員による研究發表を行った。

二〇二二年七月には、關西大學東西學術研究所との共催による國際シンポジウムを行い、近代の日本・中國における章學誠研究の開始・展開が、二〇世紀の中國學に與えたインパクトと意義を考察・討議した。

二〇二三年三月には、國際ワークショップ「中國近代における經書を受容と變容」を開催し、章學誠の目錄學の視角を踏まえながら、中國近代において經書がどのように再認識され、經學がいかなる思想的・學術的意味を持ちつつ展開したか、多角的に検討した。

『文史通義』内篇五譯注』を『東方學報』に掲

載し、それによって『文史通義』内篇の譯注刊行を完結させることができた。

二〇二二年 四月十九日 成果出版に向けて、

班長・副班長から趣旨説明とご相談
司會 古勝隆一

二〇二二年 五月一七日 『文史通義』譯注の再検討 發表者 新田元規

二〇二二年 六月一四日 研究發表
餘嘉錫の章學誠理解…繼承と批判
發表者 古勝隆一

戴震と章學誠と胡適…乾嘉への接續と學術史の文脈
發表者 竹元規人

一九世紀中國の知識人が見た章學誠とその言説…史論家・思想家への道
發表者 永田知之

二〇二二年 七月一六日 『文史通義』譯注の再検討 發表者 新田元規

二〇二二年 十月一八日 研究發表
朱陸折衷論の系譜と章學誠
發表者 福谷 彬

『尙書』の體例をめぐる一考察…章學誠「書無定體」説を手

がかりとして

二〇二二年十一月二七日 研究發表
發表者 内山直樹

章學誠（『文史・校讎の學』における義と例）
發表者 渡邊 大

張爾田と『文史通義』
發表者 竹元規人

二〇二二年十二月二一日 研究發表
劉咸忻と章學誠
發表者 田尻健太

章學誠の傳記體テキスト論
發表者 成田健太郎

二〇二三年 一月一七日 研究發表
章學誠の『史記』認識からみた史記學
發表者 李 弘喆

中國と日本における「源流」觀…章學誠を手がかりに
發表者 重田みち

二〇二三年 二月二一日 研究發表
章學誠の可能性——總論
發表者 古勝隆一

章學誠の文章論と「讀者の反應」——『文史通義』内篇「俗嫌」を中心として
發表者 永田知之

二〇二三年 三月一九日 國際ワークショップ「近代中國における經書を受容と變容」
高亨の『周易』研究について

發表者 陳 佑眞

『春秋』から『尙書』へ——二つの今古文論争

發表者 竹元規人

近代詩經學的跨文化阐释

發表者 邱 惠芬

康有爲の『春秋』觀——今文學

「微言大義」の視點から

發表者 吉田 勉

「層疊遞進・融凝成體」之孔學——錢穆《論語》解析論

發表者 金 培懿

「日本の傳統文化」を問い直す 班長 重田みち

本年度は六回の研究會を開催した。美術史、思想史、文學史、庭園史、佛教史、書道史、藝能史、書物史、などの分野の研究報告を実施したほか、最終報告書作成に向けて班員各位のドラフトを検討した。

二〇二二年 六月一九日 「證本」にみえる日本

本の書籍文化・清家の經書「證本」を中心として

發表者 王孫涵之

コメンテーター 古勝隆一

明治期の來船清人の動向について

發表者 吳 孟晉

コメンテーター 稲本泰生

二〇二二年 七月三十一日 松崎鶴雄の『詩經』

學 發表者 陳 佑眞

コメンテーター 河野貴美子

海を渡った韓書と漢籍

發表者 矢木 毅

二〇二二年 九月 四日 慈照寺弄清亭の再

建・明治前期の古社寺保存事業

との關連性についての検討を中心

に

發表者 宮崎涼子

コメンテーター 神津朝夫

平安京の中軸線と南望天闕の傳統について

發表者 外村 中

コメンテーター 水口拓壽

二〇二二年十一月二日 執筆計畫報告

發表者 神津朝夫、古勝隆一、

成田健太郎、柳 幹康

「女もの」の系譜——日本のパフォーマンス文化をジェンダー

の觀點から問い直す

發表者 ガリア・ベトコヴァ

コメンテーター 重田みち

二〇二三年 一月 八日 執筆計畫報告

發表者 佐々木孝浩、

陳 佑眞、西谷 功、

今枝杏子

燕京大學圖書館における藏書形成・日本書籍を中心として

發表者 河野貴美子

コメンテーター 吳 孟晉

二〇二三年 三月一日 執筆計畫報告

發表者 王孫涵之、福谷 彬

發表者 ガリア・ベトコヴァ

執筆計畫報告・總論

發表者 重田みち

實驗性の生態學・人新世における多種共生關係に關する比較研究

令和四年度は、初年度から續く新型コロナウイルス感染症の影響で進められなかった國際的な共同研究に注力した。鈴木と石川は、それぞれ特別

研究員としてカリフォルニア大學とアムステルダム大學との連携に取り組んだ。また、各班員は令和三年度までに行つた研究内容の整理を踏まえて、

それぞれの分野で「實驗性」の事例を探究してきた。國內では、「實驗性の生態學」と題したシリーズのもとで、ケンブリッジ大學やコペンハーゲン大學などから研究者を招き、三回の國際ワークショップを開催し、また廣島大學と二月に共催シンポジウムを実施した。

秋以降、本共同研究班の最終成果の公表に向けて、各班員は研究課題の検討を個別に進め、シンポジウムや研究會を通じて國內外の研究者と進捗状況や共同編集の内容について意見交換を行った。

二〇二二年 六月一八日 國際シンポジウム

Experimental Ecologies: Case Studies from Amazonia and Japan Testing moral judgement in Amazonia: An experiment with an experiment

發表者 Harry Walker

Experimenting in art: Sensing and knowing with contemporary Japanese artists

発表者 Iza Kavedzi

二〇二二年十二月 六日 国際シンポジウム

Ecologies of Experimentality: A

Comparative Approach to

Multispecies Coexistence in the

Anthropocene Art-farming as

reparative practices for broken

techno-ecological systems

発表者 Line Marie Thorsen

Attention, experiments, and

everyday life: Dwelling in areas

near the Fukushima nuclear

power stations

発表者 Tomoko Sakai

Umetate life. Negative heritage

and pipe dreams on a reclaimed

land in Osaka bay

発表者 Emilie Letouzey

二〇二二年十二月二日 国際シンポジウム

Ecologies of Experimentality: A

Comparative Approach to Multi-

species Coexistence in the An-

thropocene Rewilding Bangkok:

Parks and Protests as Critical

Zones

発表者 Casper Bruun Jensen

報 彙

二〇二三年 二月二〇日 国際講演會 Stefan

Ecks Lecture on Embodied

Value Theory Embodied Value

Theory 発表者 Stefan Ecks

コメンテーター

Akinori Hamada

佛敎天文学説の起源と變容

班長 小林博行

今年度も感染症流行のため研究計畫の變更を餘

儀なくされ、共同研究會はおおむねオンラインで

實施することになった。そうした變更はあったも

の、最終的には計一八回の研究會を重ね、當初

の目標であった『宿曜經』會讀は全編の通讀と問

題意識の共有を完了し、『佛國曆象編』について

は卷三の途中まで譯稿檢討を進め、また譯注出版

に向けた編集作業を開始した。また四月にはこれ

までほとんど注目をされてこなかった『宿曜經』版

木にまつわる報告を得、九月には隣接領域の科研

プロジェクトとの共催で国際シンポジウムを實施

するなど、今後の研究發展のために有意義かつ重

要な成果を得た。また三月には、班員らで企畫・

編集・寄稿した、日本科学史學會歐文誌 *Historia*

scientiarum の東アジア科学史特集號を刊行する

ことができた。また、今後の編集・檢討作業に必

要な『梵蒂岡圖書館藏明清中西文化交流史文獻叢

刊・第二輯』などの文獻を研究班豫算で購入した。

二〇二二年 四月二三日 研究報告會

江戸期高野版の板木——『宿曜

經』(享保二二年序)を中心に

発表者 金子貴昭

『佛國曆象編』譯注作成の経緯

と展望 発表者 宮島一彦

二〇二二年 五月二三日 『宿曜經』會讀 下

卷一四b一〇 行動禁閉法〜一

六b〇三 発表者 高橋あやの

二〇二二年 六月二七日 『宿曜經』會讀 下

卷一六b〇四 二十七宿三九祕

要法〜一九a〇七

発表者 清水浩子

二〇二二年 七月一〇日 『佛國曆象編』譯稿

檢討 卷二・三〇b〇六一三二

a一〇 発表者 梅林誠爾

卷二・三二b〇一三四a〇四

発表者 宮島一彦

二〇二二年 七月二五日 『宿曜經』會讀 下

卷一九a〇八 七曜直日曆〜二

〇b〇六 発表者 白 雲飛

二〇二二年 九月一日 『佛國曆象編』譯稿

檢討 卷二・三四a〇五〜三六

b〇八 発表者 小林博行

卷二・三六b〇九〜三七b〇三

十三b挿圖

発表者 平岡隆二

二〇二二年 九月一八日 *Magic in the Medi-*

eval and Early Modern Islamic

World and Europe

(中近世のイスラム圏とヨー

ロッパの魔術知) Ps.-Aristo-

telian Hermetica

發表者 Liana Saif

Magic and Kalam Theology in the 14th and 15th Centuries

發表者 Yuki Nakanishi

Paracelsian Concept of the Homunculus

發表者 Amadeo Murase

二〇二二年 九月二六日 『宿曜經』會讀 下

卷二〇b〇七 七曜占〜二四a

〇五 發表者 三村太郎

二〇二二年 十月 九日 『佛國曆象編』譯稿

檢討 卷二・三七b〇三〜三九

b〇二 發表者 宮島一彦

卷二・三九b〇三〜四一b〇七

發表者 平岡隆二

二〇二二年 十月二四日 『宿曜經』會讀 下

卷二〇b〇七 七曜占〜二四a

〇五(繼續) 發表者 三村太郎

史料紹介 發表者 宮 紀子

下卷二四a〇六 七曜直日與二

十七宿舍吉凶日曆〜二六a〇六

「本文大尾」 發表者 宮 紀子

二〇二二年十一月四日 『佛國曆象編』譯稿

檢討 卷二・四一b〇八〜四三

b〇九(卷二末)

發表者 小林博行

卷三・〇一a〇一〜〇二a〇六

發表者 宮島一彦

二〇二三年十一月二八日 『佛國曆象編』譯稿

檢討 卷二・〇二a〇七〜〇六

b〇一 發表者 平岡隆二

二〇二三年十二月二日 『佛國曆象編』譯稿

檢討 卷三・〇六b〇一〜〇七

b〇五 發表者 平岡隆二

二〇二三年十二月二六日 『佛國曆象編』譯稿

檢討 卷三・〇七b〇五〜〇九

a〇六 發表者 小林博行

卷三・〇九a〇七〜〇b〇一

發表者 宮島一彦

二〇二三年 一月二三日 『佛國曆象編』譯稿

檢討 卷二・一〇b〇一〜二

b〇八 發表者 平岡隆二

卷三・一二b〇八〜一四a〇六

發表者 小林博行

二〇二三年 二月二三日 『佛國曆象編』譯稿

檢討 卷三・一二a〇八〜一八

b〇三 發表者 小林博行

卷三・一八b〇四〜二〇a〇八

發表者 宮島一彦

二〇二三年 二月二七日 『佛國曆象編』譯稿

檢討 卷三・二〇a〇八〜二二

a〇五 發表者 宮島一彦

卷三・二二a〇六〜二三b〇一

發表者 平岡隆二

二〇二三年 三月二三日 『佛國曆象編』譯稿

檢討 卷三・二二a〇六〜二三

b〇一〇 發表者 平岡隆二

卷三・二四a〇一〜二六a〇七

發表者 小林博行

東アジア災害人文學の構築 班長 山 泰幸

本年度も五回の研究会を実施した(通算第六〜一〇回)。第六回は、北京外國語大學が主催する

國際フォーラム「二〇二二中日韓區域合作與發展論壇」にて多々納班員が基調講演をおこない、また

山泰幸班長と張政遠班員がセッションを組み報告をおこなった。第七回は、ゲストの陳亮全先生

から臺灣の大規模災害について、都留俊太郎班員から臺灣の災害と水利用について発表があった。

第八回は國際總合防災學會(DIRIA)にてセッションを組み、山班長、岡田憲夫班員、清水美香班員、大西正光班員、張班員、梶谷眞司班員が登場して、地域住民と人文科學研究者との間の

フィールドでの對話についての問題を議論した。第九回は、ゲストの植村善博先生と竹内晶子先生

から東アジアの禹王信仰と災害文化について発表があった。第一〇回は、阿部健一班員からレジリ

エンスの問題を中心に、またゲストの塚本明日香先生から中國の災異記録についての報告があり、

災害をめぐる言葉や記録の面から討論がおこなわれた。

二〇二二年 五月二七日 中日韓災害防治與安

全保障國際合作(二〇二二中日

韓區域合作與發展論壇)

東アジア災害人文學の構築

發表者 山 泰幸

巡禮と物語——災害の記憶をめぐって 発表者 張 政遠

東日本大震災の記憶と語り

発表者 金 映根

中國緊急事態管理改革及び災害NGOの發展

発表者 全 成坤

防災・減災における日中國際協力と將來への展望

発表者 伍 國春

二〇二二年

七月二三日 臺灣の災害

臺灣の大規模災害におけるコミュニティ復興及びその手法の比較——集集大地震とモラコット臺風を對象に

発表者 陳 亮全

災害と共に生きる——二〇世紀臺灣農村における水利利用

発表者 都留俊太郎

二〇二二年

九月二二日 Field-based efforts to promote communicative dialogues with local residents and researchers from humanity science—study of an implementation gap

発表者

Yoshiyuki Yama (山幸幸)

Norio Okada (岡田憲夫)

司會 Milka Shiraizu

(清水美香)

コメンテーター

Masatami Onishi (大西正光)

Ching-yuen Cheung (張 政遠)

Shinji Kajitani (梶谷眞司)

二〇二二年 十月 八日 東アジアの禹王信仰と災害文化

日本の禹王遺跡と災害文化

発表者 植村善博

大禹研究の現状と中國との交流

発表者 竹内晶子

二〇二二年十二月 三日 災害の言葉と記録

言葉にこだわる「レジリエンス・共感・「関係価値」

発表者 阿部健一

天意としての災異の記録——正史「五行志」の中の災害

発表者 塚本明日香

ポスト・パンデミック世界の新しい社会・環境理論に向けて 班長 香西豊子

本年度は一ヶ月に一回のペースで、研究班の班員に発表をしてもらい、來年度の研究報告書作成に向けて、議論を重ねた。とりわけ、コロナパンデミックの時期に宗教法人がどのような対応をしたのかや、日本の水際対策、SNSでの感染症をめぐる言説分析など、新しい論點も登場した。また、研究会の報告の一環として、二〇二二年十月

二八日に、附置研究所・センター會議第三部會シンポジウム「感染症と近代社会」で班長の香西豊子と副班長の藤原辰史がそれぞれ成果の一部を発表した。

二〇二二年 四月一八日 パンデミック第一六

回研究会

ランダムからの秩序の抽出『生命らしさ』を生み出す分子・細胞・ウイルス

発表者 糸田昌宏

二〇二二年 五月一六日 パンデミック第一七

回研究会

日本における衛生映畫の歴史

発表者 藤本大士

二〇二二年 六月一三日 パンデミック第一八

回研究会

近世後期高濱村における疱瘡流行と迫・家への影響

発表者 東 昇

二〇二二年 七月一日 パンデミック第一九

回研究会

日本經濟史からみるインフルエンザ・パンデミック——影響と対策 発表者 小堀 聰

二〇二二年 十月一七日 パンデミック第二〇

回研究会

「マスク」が政治的イシューになるとき…日本における「反マスク派」の形成」

- 二〇二二年十一月四日 潘デミック第二一回研究会 発表者 池田さなえ
- 二〇二二年十一月四日 潘デミック第二一回研究会 コロナパンデミックが宗教空間に及ぼした影響——日本における佛教儀禮の變貌 発表者 リュウシュ・マルクス
- 二〇二二年十二月二日 潘デミック第二一回研究会 Counter culture and Japanese computers: Utopia and ideology from the 1970s to the Corona-Pandemic 発表者 Till Kraudt
- 二〇二三年 一月 六日 潘デミック第二一回研究会 害蟲化する人間——計算が現實を飲み込むとき 発表者 瀬戸口明久
- 二〇二三年 二月一三日 潘デミック第二一回研究会 何が彼らを殺したか——怒りと認識の十九世紀統計史 発表者 岡澤康浩
- 東方ユーラシア馬文化の研究 班長 諫早直人
二年目にあたる本年度は、対面とオンラインとの併用により、計一〇回の研究会を実施した。定の例の研究會では、文化人類學の視點から「文化の傳播と植生」の問題について、考古學の視點から「紀元前二千年紀末の馬上戦闘武器の變化とその意義について」「古墳時代の金屬製馬具と有機質製馬具」「中國古代の車馬と弓形器」の諸問題について、文獻史學の視點から「新出漢簡にみる馬と飼料」について班員による研究報告があり、それぞれ活発な討論がおこなわれた。また、それらに加えてゲスト研究者を招へいし、「チンギス・カン祭祀と馬」「重裝騎馬戰術と佛像の成立・東漸」「古墳時代の榛名山噴火と馬」の考古學的研究、「近畿古代牧研究の成果と課題」にかんするフィールド調査と文獻史學の成果、「ポルトガルの再野生馬の生態と社會」にかんする動物學的研究の成果を講演してもらい、班員との間で議論をおこなうことにより、共同研究の視野を大きくひろげることができた。
- 二〇二二年 五月二七日 文化の傳播と植生——家畜と栽培植物をめぐる 発表者 篠原 徹
- 二〇二二年 六月一〇日 紀元前二千年紀末の馬上戦闘武器の變化とその意義 発表者 坂川幸祐
- 二〇二二年 六月二四日 チンギス・カン祭祀について 発表者 白石典之
- 二〇二二年 七月二九日 近畿古代牧研究の成果と課題 発表者 吉川敏子
- 二〇二二年 十月 七日 古墳時代の金屬製馬具と有機質製馬具 発表者 片山健太郎
- 二〇二二年 十月二一日 ポルトガルの再野生馬の生態と社會——ドローンによる空からの撮影でわかったこと 発表者 平田 聰
- 二〇二二年十一月二五日 重裝騎馬戰術と佛像の成立・東漸——暴力の制御裝置としての世界宗教 発表者 桃崎祐輔
- 二〇二二年十二月 九日 古墳時代の榛名山噴火と馬 発表者 右島和夫
- 二〇二三年 一月二七日 新出漢簡にみえる馬と飼料——懸泉漢簡と胡家草場漢簡 発表者 藤井律之
- 二〇二三年 二月一七日 中國古代の車馬と弓形器 発表者 石谷 慎
- 人物で見る第二次世界大戰 班長 林田敏子
二〇二二年度は、対面とZoomを併用するハイブリッド形式で、二〇二三年一月までに六回の例會を開催し、さらに二〇二三年三月にもう一回が豫定されている。第二次大戰という巨大にして複合的な研究對象にアプローチするため、そのうち三回を今日の研究狀況についての検討と最新の成果の攝取に充て、第二次大戰の性格規定、人物研究の意義、藝術史の中の第二次大戰、といった大きなテーマをとりあげるとともに、二回は専門家によるゲスト報告で第二次大戰研究の最前線に觸れた。二〇二三年三月の例會が個々の班員の研究報告の初回となる。例會には、班員以外にも、學

振PDや大学院生のような若手研究者が参加し、Zoomを通じて海外から議論に加わる者もある。

二〇二二年 四月 九日 第二次世界大戦と

ジェンダー 発表者 林田敏子

二〇二二年 六月 四日 第二次大戦は「反

ファシズム戦争」だったのか？

発表者 小關 隆

二〇二二年 七月三〇日 傳記叙述の可能性

発表者 藤原辰史

二〇二二年 十月 一日 第二次世界大戦は戦

後音楽史をどう決定づけたか

発表者 岡田暁生

二〇二二年十一月二六日 人物から歴史を見

る…I.カーショール『ヒト

ラー』をめぐる考察

発表者 川喜田敦子

二〇二三年 一月 七日 戦時下の往復書簡…

大叔父の足跡とアジア・太平洋

戦争 発表者 石井美保

インドにおける「循環的存在論」の形成——祭祀

思想から哲學への發展を中心に 班長 手嶋英貴

年度内に二回の班員ミーティング、九回の定例

研究会、および一回の公開シンポジウムを開催し

た。定例研究会は、前半を「テキスト輪讀」、後

半を「研究報告」の二部で構成された。前半の部

では『ヴァードゥーラ・シュラウタストラ』第

二章（新月満月祭）の三分の一程度まで読み進め

た。班員が輪番制で和譯を提示し、そこから得ら

れる知見を共有していった。後半の部では、とりわけ「循環的世界観」の形成過程の解明につながる研究報告を、班員および招聘講師が順に行った。研究会における成果の一部は、約一〇〇名が参加したシンポジウム「インド宗教文化における『循環』の思想と表象」（令和五年二月二二日開催）で広く公表された。研究会、シンポジウムは、基本的に対面とオンライン双方で参加可能なハイブリッド形式で行われた。また集會の様子を録畫し、後にYouTubeで公開した（限定公開）。

二〇二二年 五月二〇日 インドにおける「循

環的存在論」の形成——祭祀思

想から哲學への發展を中心に一

ヴィシュヌ信仰形成の諸相…初

期のクリシュナとヴィシュヌの

圖像をめぐって

発表者 大木 舞

本研究班の趣旨および研究計畫

等について 司會 手嶋英貴

二〇二三年 六月一七日 インドにおける「循

環的存在論」の形成——祭祀思

想から哲學への發展を中心に二

[Yādūla-Srauta-Sūtra 2.4.1.17

-28]（新月満月祭本祭日儀禮）

発表者 尾園絢一

The ritual practice of animal

sacrifice in pre-islamic Zoro-

astrianism: Comparing Old Ira-

nian and Old Indic sources

発表者 Eila Joel Weber

二〇二三年 七月一日 インドにおける「循

環的存在論」の形成——祭祀思

想から哲學への發展を中心に三

[Yādūla-Srauta-Sūtra 2.4.1.

29-37]（新月満月祭本祭日儀

禮） 発表者 尾園絢一

「スダナとマノーハラール」物語

と「クシヤとスダルシヤナー」

物語 発表者 中村 史

二〇二三年 九月三〇日 インドにおける「循

環的存在論」の形成——祭祀思

想から哲學への發展を中心に四

[Yādūla-Srauta-Sūtra 2.4.1.

38-2.4.2.5]（新月満月祭本祭日

儀禮） 発表者 手嶋英貴

「śanya についての一假説」、

「パーシユパタ派の灰をめぐっ

て」 発表者 高島 淳

二〇二三年 十月一日 インドにおける「循

環的存在論」の形成——祭祀思

想から哲學への發展を中心に五

[Yādūla-Srauta-Sūtra 2.4.1.

38-2.4.2.5 (c)キ]（新月満

月祭本祭日儀禮） 発表者 手嶋英貴

『シヴァダルモッタラ』におけ

るプラーナ宇宙誌のシヴァ教的

改變 発表者 横地優子

二〇二三年十一月八日

インドにおける「循環的存在論」の形成——祭祀思想から哲學への發展を中心に六 [Yadhya-Srauta-Sūtra 2.4.2.6-32] (新月満月祭本祭日・祭壇作り儀禮) 發表者 手嶋英貴 『シヴァダルモータラ』第七章の研究・シヴァ教における地獄觀とその位置づけ 發表者 高橋健二

二〇二三年

一月二〇日 インドにおける「循環的存在論」の形成——祭祀思想から哲學への發展を中心に七 [Yadhya-Srauta-Sūtra 2.4.2.6-32] (新月満月祭の祭壇作りに関するブラーフmana文獻記述) 發表者 手嶋英貴 新月満月祭の祭壇作りに関するシュルバーストラの記述 發表者 手嶋英貴

二〇二三年

二月一七日 インドにおける「循環的存在論」の形成——祭祀思想から哲學への發展を中心に八 古代後期の一神教傳統における循環論・歴史的分析和比較考察 發表者 山城貢司 祖靈祭の儀軌とマントラにみる祖靈觀と命の循環経路 發表者 蟲賀幹華

二〇二三年

二月二日 公開シンポジウム 「インド宗教文化における『循環』の思想と表象」 導入解説 司會 手嶋英貴 ヴィシュヌ信仰形成の諸相・初期のクリシュナとヴィシュヌの圖像をめぐって 發表者 大木 舞

祖靈祭の儀軌とマントラにみる祖靈觀と命の循環 發表者 蟲賀幹華

シヴァ教における地獄觀：『シヴァダルモータラ』第七章の研究 發表者 高橋健二

古代後期の一神教傳統における循環論・歴史的分析和比較考察 發表者 山城貢司

指定討論一

コメンテーター 澤井義次

指定討論二

コメンテーター 横地優子

二〇二三年

三月一七日 インドにおける「循環的存在論」の形成——祭祀思想から哲學への發展を中心に九 [Yadhya-Srauta-Sūtra 2.4.2.6-32] (新月満月祭本祭日・祭壇作り儀禮関連ブラーフmana文獻・つづき) 發表者 手嶋英貴 喉音による韻律復元に基づく

『リグ・ヴェーダ』の詩人家系の特徴 發表者 塚越袖季

「語りえぬもの」を語る行為とその表現に関する學際的研究——禪の言葉と翻譯を中心課題として 班長 何 燕生

本年度は基本的に研究計畫に沿って、研究活動を実施してきた。具體的には下記のとおりである。すべては人文研大會議室を会場に對面とリモートの兩方によるハイブリット形式での開催である。

四月三〇日(土)、第一回研究会。班員による顔合わせ、自己紹介を行い、本研究班の主旨や年度計畫を説明した。國內外から構成される班員四名が参加した。中國語の通譯は柳幹康氏(東京大)、肖琨氏。總合司會は何燕生班長。

六月二五日(土)、第二回研究会。午前は『辨道話』の會讀、午後は研究報告、四川大學周裕鍇氏、駒澤大學小川隆の二人の班員による近著紹介、發表が行われた。通譯は新潟大の土屋太祐氏、コメンテーターは東北大の齋藤智寛氏。司會は人文研所内班員古勝隆一氏。

十月一日(土)、第三回研究会。午前は『辨道話』の會讀。午後は研究報告。東京大の末末文美士氏アリゾナ大の Wu Jiang 氏からそれぞれ報告を行った。コメンテーターは早稲田大の和田有希子氏、花園大の小川太龍氏。司會は Witten 副班長、重田みち班員。

十二月一八日(日)、第四回研究会。午前は『辨道話』の會讀、午後は研究報告。關西大の水

野友晴氏、多摩美術大の安藤禮二氏による研究報告が行われた。

コメンテーターは花園大の飯島孝良氏、東京大の末木文美士氏。司會は關西大の井上克人氏、人文研所内班員の古勝隆一氏。

二〇二三年二月五日（日）、第五回研究会。午前は『辦道話』の會讀、午後は研究報告。発表者は京都大の氣多雅子氏、京都大の出口康夫氏。コメンテーターは關西大の井上克人氏、チューリッヒ大のラジ・シユタイネック氏。司會は Witem 副班長。なお、事情により、出口発表は次回へ延期。

當初は三月にも研究会を計畫していたが、年度末のため、見送ることにした。

二〇二二年 四月三〇日 共同研究禪研究班の發足にあたって

共同研究班發足の趣旨および研究計畫について

発表者 何 燕生

人文研における禪研究の歴史と本プロジェクトの位置づけ

発表者 Christian Witem

古勝隆一

二〇二二年 六月二五日 『辦道話』會讀

発表者 何 燕生

研究發表

自著を語る——『石門文字禪校

注』と禪語の特徴

発表者 周 裕鎔

司會 何 燕生
「語りえぬもの」を語る前に
——中國禪宗の歴史的特徴

発表者 小川 隆

司會 古勝隆一

コメンテーター

Christian Witem、齋藤智寛

二〇二三年 十月 一日 『辦道話』會讀

発表者 何 燕生

研究發表

日本中世禪の再検討——近著『禪の中世——佛敎史の再構築を語る』 発表者 末木文美士

コメンテーター 和田有希子

學道人は誰なのか？——黃檗希運『傳心法要』における「學道人」の用法と意味

発表者 Jhang Wu

司會 Christian Witem

二〇二三年十二月一日 『辦道話』會讀

発表者 何 燕生

研究發表

鈴木大拙の「大地」と禪との關係性の考察 発表者 水野友晴

司會 井上克人

コメンテーター 飯島孝良

鈴木大拙の神祕主義・井筒俊彦の神祕主義 発表者 安藤禮二

司會 古勝隆一
コメンテーター 末木文美士
二〇二三年 二月 五日 『辦道話』會讀

発表者 何 燕生

研究發表

西田幾多郎における哲學と禪佛敎の關係 発表者 氣多雅子

司會 Christian Witem

コメンテーター 井上克人

毛澤東體制と公安警察に関する歴史的考察

班長 周 俊

本研究班は、現代中國における毛澤東時代の公安警察と暴力に関する個別の事例研究を比較・統合し、體系的な理解へと繋げることを目的としている。本年度内には、班員全員が出席し、六つの報告が行われる研究会を開催した。この研究会は、約七時間に及ぶものであり、毛澤東時代の公安警察と暴力に關して集中的な討議が行われた。

二〇二二年十二月一日 毛澤東時代の暴力と

イデオロギー

毛澤東の人民代表會議・人民代表大會觀・暴力と民主・警戒と

協調の狭間 発表者 杜崎群傑

特情とは何か・中國共產黨の祕

密工作と公安警察

発表者 周 俊

中華人民共和國成立初期の兵役・革命關係者と農業集團化運

動 發表者 丸田孝志

建國初期の若手黨幹部の自己教育 發表者 鄭 成

農業集團化時期、李翼事件をめぐる一考察 發表者 河野 正

一九五七年「農村整風」をめぐる暴力とイデオロギー…「大躍進」の前奏、一九五七～五八年 發表者 角崎信也

コメンテーター 石川禎浩
司會 村上 衛、
都留俊太郎、小野寺史郎

科學的知識の共同性を支えるメディア実践に関する學際的研究 班長 河村 賢

二〇二二年四月から休暇期間を除き月一回ペースで班員及び外部ゲストによる研究發表を行った。發表のテーマはアメリカのテロリズム研究における合理的行為者の概念、日本における除蟲菊の栽培と産業化、反核映畫における被爆者の身體表象、戯曲の脚本において理解可能となっている天才の概念のありようなど多岐にわたったが、それぞれの研究対象に関連する知識の生成と傳播において學術論文、映像データ、商業映畫といったさまざまなメディアが果たした役割について、活発な議論が交わされた。六月と七月には近年刊行された科學史とメディア論にまたがる領域における重要な研究書である『X線と映畫』『客観性』『ラポラトリー・ライフ』の翻譯者を招き、圖像や映像が媒

介した客観性の概念の歴史的變化について探究することと、具體的なラボにおける科學者のやりとりを分析することを、等しい視座から推し進める可能性について討議した。

二〇二二年 四月二七日 例會(オンライン)

知識の歴史と知ることの歴史 發表者 岡澤康浩

二〇二二年 五月二五日 例會(オンライン)
我々がテロリストを理解しようとしていたとき…狂氣・抑壓・合理性 發表者 河村 賢

二〇二二年 六月一八日 リサ・カートライト
『X線と映畫』合評會

日本の醫學界における映畫活用の歴史 發表者 藤本大士

リサ・カートライト著『X線と映畫——醫療映畫の視覺文化史』 發表者 田中祐理子
譯者リプライ

コメンテーター 望月由紀、長谷正人

二〇二二年 七月二四日 人文研アカデミー

『實踐としての科學認識…『客観性』『ラポラトリー・ライフ』を読む』

『ラポラトリー・ライフ』紹介 發表者 金 信行

『客観性』紹介 發表者 瀬戸口明久

評者發表 發表者 前田泰樹、

全體司會 鈴木 舞、金 凡性

二〇二二年 九月二八日 例會(オンライン)
機械化時代における音楽・科學・人間——兼常清佐のピアノの實驗 發表者 瀬戸口明久

二〇二二年 十月二六日 例會(オンライン)
Making Malformed Body: Discourse and Representation of Radiation Exposure in Kansei Fumio's Anti-Nuclear Documentary Film 發表者 中尾麻伊香

二〇二二年十一月 二日 特別研究會(對面)
天才であることの達成…戯曲『アマテウス』の會話分析 發表者 吉川侑輝

コメンテーター 岡田曉生

二〇二二年十一月一六日 例會(オンライン)
Modernisation and Insecticides: Japan as the World's Leading Grower and Exporter of Pyrethrum Flowers, 1890s-1950s 發表者 キリル・カルタシヨフ

二〇二三年 二月一五日 例會(オンライン)
先端科學技術をめぐるELSI／RRI議題のアセスメント實踐と課題 發表者 標葉隆馬

知識を問うことが(賭け)になるとき——科学コミュニケーションのなかの実践的推論

発表者 河村 賢

「ELSI/ RRI研究」を作りあげる…新しい種類の研究者の存在様式の構築をめぐる

発表者 森下 翔

東方學研究部

近現代中國の制度とモデル 班長 村上 衛

本年度は三年計畫の最終年度にあたり、若手・中堅に加えてシニアの報告も行った。新型コロナウイルスの影響があったため、昨年度同様、原則としてオンラインと対面の併用で、計一七回の研究会を行い、延べ六三八人の参加者を得た。新型コロナウイルスに關する規制緩和にともない、學内の班員を中心に對面参加者が大幅に増加し、議論が一層活発となった。またオンラインを併用したことにより、中國・韓國や國內各地から参加者を得、貴重なコメント・質問をいただくことができた。なお、本研究班と關連して、現代中國研究センターでは合評會を二回、講演會を一回開催し、人文研アカデミーでもその成果を公開した。

二〇二二年 五月一三日 中國明代における

「祖制」の政治化——『明實錄』を手がかりに

発表者 岩本真利繪

コメントーター 新田元規

二〇二二年 五月二七日 「公法」と國際法の

間——朱克敬『公法十一篇』(二八八〇年)の司法に關する

議論の検討 発表者 望月直人

二〇二二年 六月一〇日 重慶政府期における

民間企業の労働力保全問題について——緩役と移動に着目して

発表者 關 藝蕃

二〇二二年 六月二四日 清末期蠶業留日學生

と中國近代蠶絲業——蠶業から蠶學へ 発表者 王 怡然

コメントーター 富澤芳亞

二〇二二年 七月 一日 清代中後期における

貨幣流通の考察——錢票を中心 発表者 任 雨晴

コメントーター 多賀良寛

明代における浙江省船舶司の廢止と開市舶に關する論争について

発表者 樊 慧慧

二〇二二年 七月二五日 清代後期北京の戒嚴

體制と巡防・團防・練勇 発表者 堀 地明

コメントーター 吉澤誠一郎

二〇二二年 十月 七日 清末における在日女

性知識人にみる諸相——何震と『天義』を中心に

コメントーター 新田元規

発表者 蔡 佑佳

コメントーター 須藤瑞代 清末におけるミリタリズム思想の公式化の経緯について——學部をめぐる考察

発表者 耿 皓楠

コメントーター 小野寺史郎

二〇二二年 十月二一日 二〇世紀中國文物の

海外への流出とその意義——『國華』および『十三松堂日記』や『南湖東遊日記』等を主な手

掛かりに

発表者 範麗雅(愛知大學)

コメントーター 瞿 艷丹

二〇二二年十一月 四日 『問刑條例』から見る

明代社會——條文形成の過程とその背景から探る

発表者 豐嶋順揮

二〇二二年十一月一八日 戦後臺灣の社會における

抽象繪畫の展開——展覽會からみた「モデル」の構築について

発表者 吳 孟晉

二〇二二年十二月 二日 「五族共和」と非漢

族の描寫——清末民初の中國歴史教科書を中心に

発表者 羅 亞妮

コメントーター 石川禎浩

二〇二二年十二月一六日 二〇世紀初頭の中國における非正規徴收について
 発表者 土居智典

二〇二三年 一月二七日 辛亥革命期までの孫文のアジア主義
 発表者 吳 舒平

二〇二三年 二月一〇日 滿洲事變直前の在滿日本人社會と滿蒙鐵道問題
 発表者 金子 豊

二〇二三年 二月二四日 滿洲を生きた在華新聞人——盛京時報社の人々を中心に
 発表者 徐 璐

二〇二三年 三月 三日 共產革命的前夜・廣東省南海縣郷村的權力與秩序 (一九四五—一九四九)
 発表者 莊 帆

二〇二三年 三月一〇日 『澳門記略』と『澳門圖說』——『廣東體制』の論理と空間
 発表者 村尾 進
 コメンテーター 豊岡康史

チベットにおけるコミュニケーションツールの研究——書簡文化の歴史的變遷と現代的意義
 班長 池田 巧

チベット語の書簡について、班員の間で基本的な知識と認識を共有するべく概説的な紹介を含む報告を聞き、分野横断的な討論と検討を行なった。書簡に加えて多様な文書の書式についての研究報告もあり、それぞれのテーマごとに検討を加え、書かれた文書の地域的、時代的な諸特徴についての理解を深めた。チベット語の書簡の書式と内容についての資料のひとつに、青木文教が請求したチベット語の書簡の書き方についてのマニュアルの寫本がある。この資料については、これまでに公式に出版されることがなく、その内容についてもほとんど知られていない。この寫本を撮影した寫真版に基づき、會讀を行うための校本を作成するべくチベット文字の入力を依頼し、デジタルテキストの作成に着手した。また定例の研究集會を對面とオンラインのハイブリッド形式で開催し、班員各位の先端的な研究成果の報告のほか、ゲストスピーカーから最新の研究報告を聞く機會を得た。

二〇二二年 四月二五日 アリアンヌ・マクドナルド著『古代チベットの王權論とソントゥエン・ガンポの宗教』の再検討
 発表者 今枝由郎

二〇二二年 五月二一日 チベットにおける書簡の發展史
 発表者 今枝由郎

発表者 ドルジェ・ツェテン
 『チベット幻想奇譚』を読む
 発表者 星 泉

二〇二二年 六月一八日 三〇年前の設問に對して提出されてきた解答例——右筆弟子による聞き書き著述と推敲作業が起す齟齬
 発表者 小野田俊藏

二〇二二年 十月二日 古代チベットにおける手紙文化とその廣がり
 発表者 長岡 慶

二〇二二年十一月一九日 Transmission on Tibetan among the Tangut
 発表者 Kirill Solomin

二〇二二年十二月一七日 トリン寺佛塔から發見された古文書について
 発表者 旗手 瞳
 民族走廊と羌族の社會文化——建築を例として
 発表者 張 曦

二〇二三年 三月 四日 Tibetan Studies in Japan Foundational Bases of Tibetan Studies in Japan
 発表者 ONODA Shunzo

(小野田俊藏)

Japanese Research on Post-Imperial Tibet: Medieval Tibet and the History of Buddhism

發表者 IUCHI Maho (井内眞帆)

The Rising Sun of the Great Perfection: rDzogs chen Studies in Japan

發表者 Marc-Henri DEROCHE From Kokka-taikkan 國歌大觀 to OTDO (Old Tibetan Documents Online)

發表者 IMAEDA Yoshiro (今枝由郎)

Historical studies of the Old Tibetan Empire in Japan and Its Features

發表者 IWAO Kazushi (岩尾一史)

二〇一三年 三月 五日 Tibetan Studies in Japan Historical Studies of Qing Dynasty Relationship with Tibet in Japan

發表者 KOMATSUBARA Yui (小松原ゆり)

Contemporary Japanese Research Trends in Early-

報 彙

Twentieth-Century Japan-Tibet Relations

發表者 KOBAYASHI Ryosuke (小林亮介)

Modern Tibetan Studies in Japan: Anthropology, Social History, and Political Science

發表者 OKAWA Kensaku (大川謙作)

Tibetan Linguistics in Japan and Its Historical Developments

發表者 EBHARA Shiho (海老原志穂)

Around Tibetology in Japan: From the Perspective of Exploration and Journalism

發表者 IKEDA Takumi (池田 巧)

前近代ユーラシア東方の戦争と外交

班長 古松崇志

研究テーマの「前近代ユーラシア東方の戦争と外交」について具體的に考察するための題材として、南宋時代の史書『三朝北盟會編』の會讀を進めた。一四回にわたって『三朝北盟會編』の會讀をおこなない、『中華再造善本』所收の中國國家圖書館(北京圖書館)所藏の明鈔本を底本に、テキストの校訂・譯注作業を進め、巻十九から巻二十

二までを讀み終えた。前年度にひきつづきオンライン會議の形式で開催した。また、共同研究班の活動に關連して、九月から十月にかけて四週連続で人文研アカデミー二〇二二オンライン連續セミナー「草原と中華のあいだ——北方王朝(遼・金・元)の興起とユーラシア東方」を開催し、班員の古松崇志・藤原崇人・渡邊健哉・飯山知保の四名が講演をおこなった。

二〇二二年 四月二日 『三朝北盟會編』卷

十九會讀 發表者 濱野亮介

二〇二二年 四月二六日 『三朝北盟會編』卷

十九會讀 發表者 高井たかね

二〇二二年 五月一〇日 『三朝北盟會編』卷

十九會讀 發表者 藤原崇人

二〇二二年 五月二四日 『三朝北盟會編』卷

十九會讀 發表者 武田和哉

二〇二二年 六月一四日 『三朝北盟會編』卷

二十會讀 發表者 古松崇志

二〇二二年 六月二八日 『三朝北盟會編』卷

二十會讀 發表者 矢木 毅

二〇二二年 七月二日 『三朝北盟會編』卷

二十會讀 發表者 飯山知保

二〇二二年 十月一八日 『三朝北盟會編』卷

二十一會讀 發表者 毛利英介

二〇二二年十一月一日 『三朝北盟會編』卷

二十一會讀 發表者 伊藤一馬

二〇二二年十一月二日 『三朝北盟會編』卷

二十一會讀 發表者 藤本 猛

二〇二二年十二月 六日 『三朝北盟會編』卷

二十一會讀 發表者 小野達哉

二〇二二年十二月二〇日 『三朝北盟會編』卷

二十二會讀 發表者 水越 知

二〇二三年 一月一日 『三朝北盟會編』卷

二十二會讀

發表者 岩本真利繪

二〇二三年 二月 七日 『三朝北盟會編』卷

二十二會讀 發表者 船田善之

前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社會

班長 稲葉 穰

一年間の延長期間を利用し、ペルシア語地方史『ヘラート史』の譯注の再検討を進めた。これは來年度中に公開豫定の日本語譯注の作成のための作業でもあるが、再度の會讀の効果として以前は不明であった韻文の解釋が可能になり、新たな關連情報が発見されるなど、翻譯、注釋ともに精度をあげることができた。また、十二月にはほぼ三年ぶりに海外からの講師アリーフ・ナウシャヒー氏（元ゴードン・カレッジ教授）を迎え、ナクシュバンデーイ教團の高名なシヤイフ、ホージャ・アフラルの傳記史料の校訂とそれによつて開催し、活発な議論を行うことができた。

二〇二二年 四月 八日 ヘラート史會讀

發表者 稲葉 穰

二〇二二年 四月二二日 ヘラート史會讀

發表者 稲葉 穰、杉山雅樹

二〇二二年 五月一三日 ヘラート史會讀

發表者 杉山雅樹

二〇二三年 五月二七日 研究報告

二〇二〇年 二月 パキスタン調査報告

發表者 小倉智史

(東京外國語大學)

バクトリア語史料と中央アジア

二〇二二年 六月二〇日 ヘラート史譯文の再

史 發表者 宮本亮一

二〇二二年 七月 八日 ヘラート史譯文の再

検討 發表者 稲葉 穰、他

二〇二二年 十月一四日 ヘラート史譯文の再

検討 發表者 稲葉 穰、他

二〇二二年十一月一日 研究報告ハラム文書

研究とエルサレム訪問(二〇二二年九月) 發表者 川本正知

二〇二二年十一月二五日 ヘラート史譯文の再

検討 發表者 稲葉 穰、他

二〇二二年十二月 九日 特別講演ゴードン・

カレッジホージャ・ウバイ

ドゥツラー・アフラルの傳記

發表者 Arif Nushahi

二〇二三年 一月二七日 ヘラート史譯文の再

検討 發表者 稲葉 穰、他

二〇二三年 二月一〇日 ヘラート史譯文の再

検討 發表者 稲葉 穰、他

二〇二三年 二月二四日 ヘラート史譯文の再

検討 發表者 稲葉 穰、他

二〇二三年 三月一〇日 ヘラート史譯文の再

検討 發表者 稲葉 穰、他

検討 發表者 稲葉 穰、他

二〇二三年 三月二四日 ヘラート史譯文の再

検討 發表者 稲葉 穰、他

二〇世紀中國史の資料的復元 班長 石川禎浩

隔週金曜午後には研究班例會を開催することを中心に活動を進めた。班員は六二名、毎回の研究班例會の平均出席者数は二九名であった。昨年に引き続き新型コロナウイルスの感染擴大のため、ハイフレックス方式による開催となったが、幸い平常時と同様の規模・質を維持することができた。特にオンライン参加が可能であることをいかにして、東京や中國で活躍する複数の研究者による積極的な参加を得ることができた。年度内の例會開催回数は一六回を数え、毎回事前にレジユメを班員に配布し、またコメントーターをつけて、専門的見地から議論を深められるよう工夫した。

本年度は四年目にあたり、研究班の課題である「資料的復元」に對する班員の理解は十分に深まった。例會における議論も、各班員の専門知識と班員間の對話・協働にもとづいた、濃密なものとなった。

研究班の成果をまとめる論文集の公刊に向けて、十分な作業を進めることができた。

二〇二二年 四月一五日 ラテン化新文字運動

史の資料的復元・倪海曙による

編纂作業を手がかりとして

發表者 都留俊太郎

コメントーター 温 秋穎

二〇二二年 四月二二日 開明書店版『曹禺選集』(一九五一年)収録『雷雨』の諸問題…人民共和國建國直後知識人の精神形態

発表者 瀬戸 宏

二〇二二年

五月二〇日 戦前日本の中国語學習誌…中国語教育—中国語界を読み解く基礎資料として

発表者 温 秋穎

二〇二二年

六月三日 「中国人民は立ち上がった」に関する若干の考察…「人民」定義の變遷とともに

発表者 和田英男

二〇二二年

六月一七日 廣東農民運動期中国共産黨の黨内通信と文書の性格…海陸豊及び東江を中心として

発表者 蒲 豊彦

二〇二二年

七月 八日 山東出兵前後における無産政黨 發表者 福家崇洋

コメントーター 武藤秀太郎

二〇二二年

九月三〇日 盛政權初期における國民政府の統合戰略…新疆の振興計畫と回民補習班の實態をめぐる考察 發表者 程 天徳

コメントーター 王 柯

二〇二二年 十月一四日 近代中国における植物學資料の整理と出版…『植物名實圖考』を中心に

發表者 瞿 艷丹

二〇二二年

十月二八日 戦後日本華僑史の基礎資料としての『華僑報』と『自由新聞』…その利用と課題

發表者 岡野翔太

二〇二二年十一月一日 第一次世界大戦の歴史の意味…梁啓超らの「歐戰」認識を中心として

發表者 高柳信夫

二〇二二年十一月二五日 馮自由と民國初年の臨時稽勳局…その革命史著述への影響

發表者 土肥歩

二〇二二年十二月 九日 『郷土文學』を讀みたがったのは誰か…文藝誌の書評欄から探る

發表者 津守 陽

二〇二三年 一月二〇日 宣傳の霧…一九四四年中外記者西北參觀團の若干の史實に関する考察

發表者 丁 麗瓊

二〇二三年 二月 三日 一九五〇年代中国農村の離婚問題…離婚裁判史料からみる女性と社會

發表者 鄭 浩淵

二〇二三年 二月 一七日 現代中国政治の轉換と農村幹部…河北省邢臺縣の事例

發表者 田中 仁

二〇二三年 三月一七日 羅振玉の古器物學に関する再検討…日本の學者との關係をめぐって

發表者 莊 帆

二〇二三年 三月一七日 羅振玉の古器物學に関する再検討…日本の學者との關係をめぐって

發表者 吳 孟晉

古典中國語のコーパスの研究 班長 安岡孝一
古典中國語(漢文) Universal Dependenciesを
検討しつつ、實際にコーパス化をおこなった。具
體的には、新釋漢文大系『日本漢詩』『戰國策』
『世說新語』を検討対象とし、順次コーパス化を
おこなった。

また、これらのコーパスのうち、検討が終了した
ものから、Universal Dependencies 2.10ならび
に Universal Dependencies 2.11として、カレル
大學 LINDAT/CLARINと共同で W W W 公開し
た。

古典中國語係り受け解析アルゴリズムとしては、
従來の Blahine 法に加え、Question Answering
を用いる手法や、goeswithリンクによる手法に

挑戦した。特に goeswith リンクによる手法は、古典中國語のみならず、他の孤立語（ベトナム語やタイ語）にも應用可能であり、手法としての廣がりが大さそうである。

- 二〇二二年 四月一五日 Universal Dependencies における A U X の扱
漢詩』
- 二〇二二年 五月二〇日 新釋漢文大系『日本漢詩』
- 二〇二二年 六月三日 新釋漢文大系『日本漢詩』Editor 開發
- 二〇二二年 六月一七日 Transformers の Question Answering を用いた係り受け解析器
- 二〇二二年 七月一日 『古漢語詞義注語料庫的構建及應用研究』
- 二〇二二年 七月一五日 新釋漢文大系『戰國策』
- 二〇二二年 七月二九日 東洋學へのコンピュータ利用第三五回研究セミナー低品質文字畫像を用いた高精度畫像からの字形自動再切り出しの試み
- 發表者 守岡知彦
- 二〇二二年 九月一六日 nsuji.outer と csuji.outer の追加
- 二〇二二年 九月二〇日 roberta-classical-chinese-base-ud-goeswith による句間リンク抽出
- 二〇二二年 十月二二日 roberta-classical-chi-

nese-base-ud-goeswith による句間リンク抽出

- 二〇二二年十一月四日 roberta-classical-chinese-base-ud-goeswith による句間リンク抽出
 - 二〇二二年十一月一八日 Universal Dependencies 2.11 リリース
 - 二〇二二年十二月二日 『第四回 IndJ 學術大會』報告
 - 二〇二二年十二月一六日 roberta-classical-chinese-base-ud-goeswith の解析手法を他の言語に應用する
 - 二〇二三年 一月二〇日 共同研究班まとめ
- 北朝石窟寺院の研究Ⅱ 班長 岡村秀典
今年度は研究班の最終年度にあたるため、東方文化研究所が一九三八〜一九四四年に中國山西省大同市雲岡石窟で調査した人文研所藏ガラス乾板の寫真と拓本原報告（水野清一・長廣敏雄『雲岡石窟』全一六卷、一九五一―五六）と新報告（京大人文研・中國社會科學院考古研究所編『雲岡石窟』全四卷、二〇一七）、現地の雲岡石窟研究院などが新たに調査報告した資料など、雲岡石窟における北魏から遼金までの石刻を網羅的に集成し、釋文・語注・解説を加えた倉本尚徳主編『雲岡石刻錄——『雲岡金石錄』改訂版』を『東方學報』京都第九七冊に發表した。また、招へい研究員として來所されたイ・リドゥ先生（フロリダ國際大學）に人文研國際研究ミーティングとして六月二

一日に「從《大吉義神呪經》對石窟功能的再思考」、七月五日に「對山東青齊地區窟龕造像及題記的再思考」、七月一九日に「對平城墓葬中佛教題材的思考——以邢合姜墓壁畫爲例」と題する連續講演會を實施した。その成果論文は來年度の『東方學報』に發表される豫定である。

- 二〇二二年 四月五日 雲岡石刻錄
- 二〇二二年 四月一九日 雲岡石刻錄
- 二〇二二年 五月一七日 雲岡石刻錄
- 二〇二二年 六月七日 雲岡石刻錄
- 二〇二二年 六月二二日 從《大吉義神呪經》對石窟功能的再思考
- 二〇二二年 七月五日 對山東青齊地區窟龕造像及題記的再思考
- 發表者 Lidu Yi
- 二〇二二年 六月二二日 對平城墓葬中佛教題材的思考——以邢合姜墓壁畫爲例
- 發表者 Lidu Yi
- 中國在家の佛教觀：唐道宣撰『廣弘明集』を讀む
- 班長 船山 徹
- 共同研究班名の通り中國中世の在家佛教徒に焦點を當て、在家者が抱いている佛教とは何か、佛教のいかなる部分が必要とされていたかを探る文献

會讀を一六回行った。具體的には唐の道宣撰『廣弘明集』卷十九と卷二十に收める六朝時代の南朝貴族が書いた佛教文献を対象として取り上げ、その原文校訂と現代語譯と原文用語についての語注を作成した。最終的結論を示すことは時期尙早であるので言明を控えるが、現時点でわかった事柄及び恐らく結論として言えそうな感觸を抱く事柄は既に幾つか蓄積することができている。例えば

第一に、在家者は出家者教團の生活規則を集成する『律』(ヴィナヤ)の閲覽を許されていないかつたという一般的前提に沿う結論として、在家者の著した文中から『律』を典據とすると確實に断定できるものを探し出すことが現時点ではできていない。第二に、佛教書を構成する經典・律・論書のうち、在家者が律を用いないことは上述の通りであるが、論書への言及についても論書の種類が限定される。つまり、在家者は全ての論書を読んでいたわけではない。第三に、經典についても在家者が頻繁に引用する經典名と内容には一定の傾向があり、さらに經典の注釋書にまで踏み込んでいる事例を確定的に示すことは難しい。

- 二〇二二年 四月一日 『廣弘明集』會讀陸雲「御講波若經序」(三) 譯注 發表者 倉本尙徳
- 二〇二二年 五月 六日 『廣弘明集』會讀陸雲「御講波若經序」(四) 發表者 趙ウニル
- 二〇二二年 五月二〇日 『廣弘明集』會讀蕭子顯「御講金字摩訶般若波羅蜜

經序」(一)

- 二〇二三年 六月 三日 『廣弘明集』會讀蕭子顯「御講金字摩訶般若波羅蜜經序」(二) 發表者 久永昂央
- 二〇二三年 六月二七日 『廣弘明集』會讀蕭子顯「御講金字摩訶般若波羅蜜經序」(三) 發表者 古勝隆一
- 二〇二三年 七月 一日 『廣弘明集』會讀蕭子顯「御講金字摩訶般若波羅蜜經序」(四) 發表者 魏 藝
- 二〇二三年 七月二五日 『廣弘明集』會讀蕭子顯「御講金字摩訶般若波羅蜜經序」(五) 發表者 古勝隆一
- 二〇二三年 九月二六日 『廣弘明集』會讀「發般若經題」(一) 發表者 船山 徹
- 二〇二三年 十月 七日 『廣弘明集』會讀「發般若經題」(二) 發表者 中西龍也
- 二〇二三年 十月二一日 『廣弘明集』會讀「發般若經題」(三) 發表者 趙ウニル
- 二〇二三年十一月一八日 『廣弘明集』會讀「發般若經題」(四) 發表者 倉本尙徳
- 二〇二三年十二月 二日 『廣弘明集』會讀「發般若經題」(五) 發表者 古勝隆一

- 二〇二三年十二月一六日 『廣弘明集』會讀「發般若經題」(六) 上 垂爲 開講日參承」發表者 久永昂央
- 二〇二三年 一月二〇日 『廣弘明集』會讀「廣弘明集卷第二十」十蕭綱「上大法輪表」十「大法輪」 發表者 河上麻由子
- 二〇二三年 二月一七日 『廣弘明集』會讀蕭綱「大法輪」(并序)「(一) 發表者 魏 藝
- 二〇二三年 三月 三日 『廣弘明集』會讀蕭綱「大法輪」(并序)「(二) 發表者 中西俊英

東方文化研究所舊藏漢籍の整理と研究

本年度は前期一四回、後期一三回、合計二七回、Zoomにて開催し、毎回一點ずつ、寫真を見ながら序跋の會讀及び書誌情報の検討を行った。會讀の成果は「典據情報」としてまとめ、全國漢籍データベースにリンクさせる形で順次公開していく豫定である。

- 二〇二二年 四月一三日 東方文化研究所續增漢籍目錄經部書類 發表者 永田知之
- 二〇二二年 四月二〇日 東方文化研究所續增漢籍目錄經部書類 發表者 永田知之
- 二〇二二年 四月二七日 東方文化研究所續增漢籍目錄經部書類 發表者 永田知之

- 漢籍目錄經部書類
 二〇二二年 五月一日 東方文化研究所續増
 漢籍目錄經部書類
 二〇二二年 五月一八日 東方文化研究所續増
 漢籍目錄經部書類
 二〇二二年 五月二五日 東方文化研究所續増
 漢籍目錄經部書類
 二〇二二年 六月一日 東方文化研究所續増
 漢籍目錄經部書類
 二〇二二年 六月八日 東方文化研究所續増
 漢籍目錄經部書類
 二〇二二年 六月二二日 東方文化研究所續増
 漢籍目錄經部書類
 二〇二二年 六月二九日 東方文化研究所續増
 漢籍目錄經部書類
 二〇二二年 七月六日 東方文化研究所續増
 漢籍目錄經部詩類
 二〇二二年 七月一三日 東方文化研究所續増
 漢籍目錄經部詩類
 二〇二二年 七月二〇日 東方文化研究所續増
 漢籍目錄經部詩類
 二〇二二年 七月二七日 東方文化研究所續増
 漢籍目錄經部詩類
 二〇二二年 十月二二日 東方文化研究所續増
 漢籍目錄經部詩類
 二〇二二年 十月一九日 東方文化研究所續増
 漢籍目錄經部詩類
 二〇二二年 十月二六日 東方文化研究所續増
 漢籍目錄經部詩類
 二〇二二年十一月二日 東方文化研究所續増
 漢籍目錄經部詩類
 二〇二二年十一月二六日 東方文化研究所續増
 漢籍目錄經部詩類
 二〇二二年十一月三〇日 東方文化研究所續増
 漢籍目錄經部詩類
 二〇二二年十二月七日 東方文化研究所續増
 漢籍目錄經部詩類
 二〇二二年十二月一四日 東方文化研究所續増
 漢籍目錄經部書類
 二〇二二年十二月二一日 東方文化研究所續増
 漢籍目錄經部書類
 二〇二二年十二月二八日 東方文化研究所續増
 漢籍目錄經部書類
 二〇二三年 一月一日 東方文化研究所續増
 漢籍目錄經部書類
 二〇二三年 一月一八日 東方文化研究所續増
 漢籍目錄經部書類
 二〇二三年 一月二五日 東方文化研究所續増
 漢籍目錄經部書類
 漢籍共同研究システムの構築
 班長 ウィットイルン クリスティアン
 今年度は五年計畫の二年度になります。毎回の
 研究會はZoomで行い、オーストラリアからヨー
 ロッパまで海外からの参加者は多いため、日本時
 間の午後五時からのスタートで開催します。
 前年度より具體的に共同研究プラットフォーム
 の機能と開發過程について議論が行いました。一
 つの事例としては數學文獻についての機能の取り
 組みとこれから追加するテキストを檢討しました。
 具體的な課題として、WikidataやLODへの對應
 の必要が浮き彫りになりました。

- 二〇二二年 四月二二日 The Bibliotheca Polyglotta and the ideas on which it is built 發表者 Jens Bravvig
- 二〇二二年 五月一三日 Current state and future plans for the TLS research platform 發表者 Christian Wittem
- 二〇二二年 五月二七日 Universal Dependencies for Classical Chinese 發表者 安岡孝一
- 二〇二二年 六月一〇日 Analytical Framework for the TLS 發表者 Christoph Harbsmeier
- 二〇二二年 七月 八日 The Logic, Syntax and Semantics of Numerals in pre-Buddhist Chinese 發表者 Valerie Kiel
- 二〇二二年 十月一四日 A review of Wikidata in DH projects and some cases in the study of premodern Chinese culture 發表者 Fudie Zhao
- 二〇二二年 十月二八日 Character taxonomies, text editing and other recent developments in the TLS collaborative research environment 發表者 Christian Wittem
- 二〇二二年十一月二五日 The natural language of mathematics and its technical challenges in the TLS 發表者 Andrea Breard
- 二〇二二年十二月 九日 Representation of mathematical texts in TLS and other topics 發表者 TLS Project
- 二〇二三年 一月二七日 Lexeme Relations and Lexeme Constructions in the Flemaker version of the TLS 發表者 David Sehmal
- 秦漢法制史料の研究 班長 宮宅 潔
まず、嶽麓書院所藏簡《秦律令(壹)》に見える法律用語の分析や、掘り下げるべき条文の検討についての研究報告を行った。この報告内容を基に研究ノートを班員が執筆し、《秦律令(壹)》全体の譯注とともに一書にまとめる編集作業を進めた。この譯注書は年度内に完成し、関連する研究者に配布した。
- 同時に、『秦律令(二)』の會讀を始め、約五〇簡を讀了した。里耶秦簡(壹)の會讀もこれと平行して行い、これについては關係論文を中國・武漢大學のHP「簡帛網」に投稿し、掲載された。
- 二〇二二年 四月 一日 嶽麓簡譯注考證篇豫備發表
上計 發表者 曹 天江
「廢」と官人處罰の變化 發表者 郭 聰敏
- 二〇二二年 四月 八日 嶽麓簡譯注考證篇豫備發表
故壘・故微 發表者 太田麻衣子
蜀巴——關連問題の考證 發表者 楊 長玉
- 二〇二二年 四月一五日 嶽麓簡譯注考證篇豫備發表
嶽麓〔肆〕三四一〜三四二簡の考察 發表者 目黒杏子
居縣 發表者 安永知晃
- 二〇二二年 四月二二日 嶽麓簡譯注考證篇豫備發表
行書律について 發表者 畑野吉則
同居——世帯構成員を指す法律用語 發表者 鷺尾祐子
- 二〇二二年 五月 六日 嶽麓簡譯注考證篇豫備發表
嶽麓〔肆〕三六六〜三七一簡「毋奪田時令」をめぐる——律令と官威のあいだ 發表者 佐藤達郎
論令出會之 發表者 鷹取祐司
- 二〇二二年 五月一三日 嶽麓簡譯注考證篇豫備發表
名詞の後につく「所」 發表者 角谷常子
- 嶽麓書院所藏簡《秦律令(壹)》

- 解題 發表者 宮宅 潔
 二〇二三年 五月二〇日 嶽麓簡會讀嶽麓(伍)
 發表者 宮宅 潔
 二〇二三年 五月二七日 嶽麓簡會讀嶽麓(伍)
 發表者 宮宅 潔
 二〇二三年 六月三日 嶽麓簡會讀嶽麓(伍)
 發表者 宮宅 潔
 二〇二三年 六月一〇日 嶽麓簡會讀嶽麓(伍)
 發表者 宮宅 潔
 二〇二三年 六月一七日 嶽麓簡會讀嶽麓(伍)
 發表者 西 眞輝
 二〇二三年 六月二四日 嶽麓簡會讀嶽麓(伍)
 發表者 西 眞輝
 二〇二三年 七月一日 嶽麓簡會讀嶽麓(伍)
 發表者 西 眞輝
 二〇二三年 七月八日 嶽麓簡會讀嶽麓(伍)
 發表者 西 眞輝
 二〇二三年 七月一五日 嶽麓簡會讀嶽麓(伍)
 發表者 宗周太郎
 二〇二三年 七月二二日 嶽麓簡會讀嶽麓(伍)
 發表者 宗周太郎
 二〇二三年 七月二九日 嶽麓簡會讀嶽麓(伍)
 發表者 宗周太郎
 二〇二三年 七月二九日 嶽麓簡會讀嶽麓(伍)
 發表者 宗周太郎
 二〇二三年 九月二日 嶽麓簡會讀嶽麓(伍)
 發表者 宗周太郎
 二〇二三年 九月九日 里耶秦簡會讀里耶秦
 簡⑧一一〇⑧一一四三
 發表者 目黒杏子
 二〇二三年 九月一六日 嶽麓簡會讀嶽麓(伍)
 發表者 目黒杏子
- 三〇一三八 發表者 土口史記
 二〇二三年 九月三〇日 里耶秦簡會讀里耶秦
 簡⑧一一八⑧一二二一
 發表者 畑野吉則
 二〇二三年 十月二四日 嶽麓簡會讀嶽麓(伍)
 發表者 土口史記
 二〇二三年 十月二日 里耶秦簡會讀里耶秦
 簡⑧一二二⑧一二四三
 發表者 宮宅 潔
 二〇二三年 十月二八日 嶽麓簡會讀嶽麓(伍)
 發表者 土口史記
 二〇二三年 十一月四日 里耶秦簡會讀里耶秦
 簡⑧一二二⑧一二四三
 發表者 宮宅 潔
 二〇二三年 十一月八日 嶽麓簡會讀嶽麓(伍)
 發表者 太田麻衣子
 二〇二三年 十一月二五日 里耶秦簡會讀里耶秦
 簡⑧一二二⑧一二四三
 發表者 宮宅 潔
 二〇二三年 十二月二日 嶽麓簡會讀嶽麓(伍)
 發表者 太田麻衣子
 二〇二三年 十二月九日 里耶秦簡會讀里耶秦
 簡⑧一二二⑧一二四三
 發表者 宮宅 潔
 二〇二三年 十二月二六日 嶽麓簡會讀嶽麓(伍)
 發表者 太田麻衣子
- 二〇二三年 十二月三日 里耶秦簡會讀里耶秦
 簡⑧一三一⑧一三三三
 發表者 劉 聰
 二〇二三年 一月六日 嶽麓簡會讀嶽麓(伍)
 三九一四七 發表者 太田麻衣子
 二〇二三年 一月一三日 里耶秦簡會讀里耶秦
 簡⑧一三三⑧一三五三
 發表者 劉 聰
 二〇二三年 一月二〇日 嶽麓簡會讀嶽麓(伍)
 四八一五五 發表者 林 怡冰
 二〇二三年 一月二七日 里耶秦簡會讀里耶秦
 簡⑧一三三⑧一三五三
 發表者 劉 聰
 二〇二三年 二月三日 嶽麓簡會讀嶽麓(伍)
 四八一五五 發表者 林 怡冰
 二〇二三年 二月一〇日 里耶秦簡會讀里耶秦
 簡⑧一三三⑧一三五三
 發表者 劉 聰
 二〇二三年 二月一七日 嶽麓簡會讀嶽麓(伍)
 四八一五五 發表者 林 怡冰
 二〇二三年 二月二四日 里耶秦簡會讀里耶秦
 簡⑧一三三⑧一三五三
 發表者 劉 聰
 二〇二三年 三月三日 嶽麓簡會讀嶽麓(伍)
 四八一五五 發表者 林 怡冰
 二〇二三年 三月一〇日 里耶秦簡會讀里耶秦
 簡⑧一三五⑧一三九一
 發表者 飯田祥子
 二〇二三年 三月一七日 嶽麓簡會讀嶽麓(伍)
 發表者 飯田祥子

東アジアの宗教美術と社會

班長 稻本泰生
 初年度の本年度は對面・オンラインのハイブリッドで研究会を開催し、メンバーの参加形態は各回ともほぼ半々であった。「龍門北朝窟の造像と造像記」の後継班として發足した當班では研究所の藏する拓本資料を活用し、龍門石窟造像記の讀解を繼續して行つてゐる。過去五年で確立した手順に沿つて、文字だけに注目するのではなく、無紀年・無銘分も含めた全ての造像について、壁面のブロック単位で網羅的に検討する作業を進めており、最も重要な北朝窟の一つである蓮華洞について、洞外も含めた全壁面の検討を終了した。ついで賓陽三洞の造像と造像記に着手し、賓陽中洞洞外壁面の検討を終えた。この通例の會に加えてメンバー各人の専門分野に沿つた研究報告にも力を入れ、中央アジアから東アジアに及ぶ、佛教關連の造形資料と文字資料を扱つた多彩な發表が行われた。また下野玲子氏をゲストスピーカーとして招き、佛頂尊勝陀羅尼の信仰と美術に關する包括的かつ最新の研究成果を共有することができた。

二〇二二年 四月一二日 新研究班發足にあつた
 發表者 稻本泰生

龍門蓮華洞南壁造像記の再検討
 發表者 富岡采花
 二〇二二年 四月二六日 研究報告・フリーア
 美術館所藏法界佛像の「世界

圖について

二〇二二年 五月一〇日 龍門蓮華洞南壁造像記の再検討
 發表者 易 丹鈞

二〇二二年 五月二四日 龍門蓮華洞南壁造像記の再検討
 發表者 田林 啓

二〇二二年 六月一四日 龍門蓮華洞南壁造像記の再検討
 發表者 田林 啓

二〇二二年 六月二八日 龍門蓮華洞南壁造像記の再検討
 發表者 田林 啓

二〇二二年 七月二二日 龍門蓮華洞外壁造像記の再検討
 發表者 田林 啓

二〇二二年 七月二六日 研究報告・白鶴美術館藏白石蓮臺について
 發表者 田林 啓

二〇二二年 七月二六日 研究報告・北朝後期晉豫交界地區における造像活動と地域社會——地方官・中小豪族、そして民

二〇二二年 十月一日 研究報告・敦煌に現れたコータンの文化——研究プロジェクト「九世紀から一一世紀にかけての敦煌におけるコータン關連佛畫の總合的研究」の背景と目標
 發表者 エリカ・フォルテ

二〇二二年 十月二五日 龍門蓮華洞外壁造像記の再検討
 發表者 田林 啓

二〇二二年十一月 八日 龍門蓮華洞北壁造像記の再検討
 發表者 田林 啓

記の再検討(補遺)及び賓陽三洞の概要と論點
 發表者 稻本泰生

龍門賓陽中洞外壁造像記の再検討
 發表者 苦名 悠

二〇二二年十一月二二日 龍門賓陽中洞外壁造像記の再検討
 發表者 苦名 悠

二〇二二年十二月一三日 龍門賓陽中洞外壁造像記の再検討
 發表者 苦名 悠

二〇二三年 一月一〇日 研究報告・佛頂尊勝陀羅尼と佛陀波利譯經序に關する諸問題
 發表者 下野玲子

二〇二三年 一月二四日 研究報告・東大寺大佛殿四天王像考
 發表者 富岡采花

龍門賓陽中洞外壁造像記の再検討
 發表者 苦名 悠

二〇二三年 二月一四日 研究報告・供養者像を楽しむ——中國からウズベキスタンまで
 發表者 石松日奈子

人文學研究部

環境問題の社會史的研究

班長 岩城卓二
 研究實施計畫最終年度となる本年度は一五回の研究会を開催し、ヒトの自然觀、開發と自然災害の因果關係、生業と環境問題、公害・環境被害が

社會問題化した以降の社會の對應等についての検討を深めるとともに、「ヒトの生きる力が「近代化」が進行する過程でどのように變化していくのかについて、日本の近世から高度經濟成長期までを中心に具體的な事例をふまえ、世界の諸國・諸地域の事例とも比較しながら検討した。二〇二二年十二月一〇日には、人文研アカデミーオンラインシンポジウム「山に生きる——なりわいと環境の歴史學」を開催し、日本近世における山を対象に、「ヒトの環境への働きかけについて考えた。また尼崎市立歴史博物館あまがさきアーカイブズにおいて公害訴訟資料、國內博物館において環境展示の實態調査を計四回行い、公害被害がどのように資料化され、また伝えられているのかについて検討し、圖録類をはじめ關係資料を収集した。人の分類と人種化に関する國際比較研究

班長 竹澤泰子

本年度は、最終年度として成果公開のための出版打ち合わせなどを優先的に行なった。人間の「ちがひ」と差別についても、研究會を重ねた。「環太平洋地域における移動と人種」の英語版を作成するために、研究會を実施し、その結果、以下にあるように、「Race and Migration in the Transpacific (田邊明生氏との共編)をRoutledgeから出版することができた(二〇二二・一)。また遺傳子検査ビジネスに関する共同研究も、その成果を「Anthropological Sciences 特集號 Genetics, DTC, and Their Social Implications」が二〇二二・二に出版される豫定である。さらに人種と人

種主義の可視性・不可視性については、Routledgeから査讀の上、出版が決まり、今年中に、Visibilities and Invisibilities of Race and RacismがYasuko Takezawa, Faye V. Harrison, and Akio Tanabe eds.として出版される豫定である。

班長 高木博志

二〇二二年度は一回の研究班を開催し、報告は、歴史學・映畫史・宗教史・音樂史・美術工藝史などの學際的な内容であった。そのうち九月には今尾文昭氏の案内で百舌鳥古墳群のフィールドワークをし世界遺産がかかえる問題や歴史的な變遷を考えた。十月には京都工藝纖維大學美術工藝資料館「デザインの夜明け…京都高等工藝學校初期一〇年」展、二〇二三年三月には向日市文化資料館「壽嶽文章と向日庵本の世界」を観覽し、研究會をもった。二〇二三年二月一日には、「近代天皇制を考える學術集會」をもち研究者・市民、一〇名の参加者を得た。初年度であるために「近代日本と宗教と文化」のテーマに關わる共同研究の可能性を多様な研究報告のなかで探っている。據點經費は、すべてが招へい旅費で使っており、不足分は、科研費や分野經費で補っている。前回の共同研究「近代京都と文化」の研究成果として、「人文學報」二二〇號を刊行したので、それをもとに研究班において批判的な検討を行った。帝國日本の「財界」形成についての研究…一八九五—一九四五年 班長 籠谷直人

して取りまとめ、出版・公開する方向で研究を実施している。本年度の前半は、過去におこなったインタビュー記録の整理、年表の作成、寫眞の整理等をすすめた。途中で研究代表者がコロナウイルスに感染して入院したことで、二〇二二年一月はじめまでの研究班の例會の開催は停滯してしまつた。しかし、日臺間の移動が解禁されたこともあり、二〇二三年一月から二月にかけて、臺灣の研究機關に所屬する班員のオンライン参加もえて、計四回の例會を開催することができた。特に、三好登美子夫人、株式會社祇園辻利の安田益弘氏に對するインタビューを実施したことで、三好通弘氏にかんする記述を十分に補足する見通しを得た。すでに補足インタビューの記録の整理は完了しており、再度のインタビューのスケジュールを調整するとともに、完成原稿の作成につとめている。

藝術と社會——近代における創造活動の諸相

班長 高階繪里加

一年間の延長が認められたため四年計畫の第三年目となった本年は、計八回の研究會を開催した。内容は以下の通りである。「初期の文部省美術展覽會と社會」「セザンヌと社會」「近代繪畫における「引」掻き」「近代日本におけるベルギー美術の受容について」「ドキュメント再考」「映畫評論家としての戦後知識人、戦後知識人としての映畫評論家」「フランス美術の「傳統」について——包括と排除」「表装界が迎えた近代」。近現代の東京、京都、フランス、ベルギー等における藝術的

創造行爲と社會狀況のさまざまな影響關係や變化の様相について、實證的且つ新知見をもたらす報告が行われた。いずれの研究會においても、発表後に藝術と社會に關わる活発な議論が交わされた。ポストリヒューマン時代の起點としてのフランス象徴主義

班長 森本淳生

令和四年度は研究報告會と譯讀會を計一〇回開催した。報告會では昨年度にひきつづき、メンバーがそれぞれの研究テーマについて発表し知見の共有に努めた。具體的には象徴主義を、理論・音楽・演劇・經濟・ジェンダー・終焉・日本での受容・リアリズムとの關連等から考察した。あわせて、人文研アカデミーの枠内でシンポジウム「ヴィリエ・ド・リラダンとフランス象徴主義——『残酷物語』と『未來のイヴ』が現代に語りかけてくるもの』を開催し、社會還元に努めた。譯讀會では、ギルの詩集『至善の生成 (Le malin leur devenir)』を最終節まで読み進め、日本語譯と註解の作成を終えた。來年度にプロローグ・エピソード部分の譯稿を作成し全體を整理した上で紀要等に發表する豫定である。同書はフランスでも註解がほとんど存在せず、翻譯されるもの(英譯等も含め)世界初の試みである。企畫している象徴主義に關する「讀む事典」についてはいくつかの項目の執筆を開始し、具體化に向けて動き出している。

近現代日本の研究資源に關する基礎的研究班

班長 小堀 聰・福家崇洋

本年度は主に人文研所藏岩井會舊藏資料の整理

と核融合科學研究所所藏の森一久資料の調査と整理を行った。前者は大阪の岩井會から昨年度寄贈を受けたもので、一九七〇〜一九九〇年代の市民運動の機關紙誌、ピラなどから構成される。およそ月一回のペースで班員が集まって資料を分類することから始め、現在は目録の作成を繼續中である。年度末にアルバイト一名を雇用し、目録化の作業を迅速化した。後者の資料は、原子力産業會議副會長などを歴任した森一久の舊藏資料で、一九五〇〜二〇〇〇年代にかけての原子力政策關係資料で構成されており、その約半分は未整理状態にある。本年度は二回調査を実施し、整理済み資料の内容を検討したうえで、未整理資料の目録化を開始した。以上の資料整理の他に他機關所藏の資料整理に對する見聞を深めるべく、班員を募つて尼崎歴史博物館への見學を行い、同館所藏の資料を拜見し、職員の方と資料整理の方法などにつき意見交換を行った。

家族と愛の研究班

班長 富山一郎

初年度である二〇二二年度には、九回の例會を開催し、メンバー相互の對話をスタートさせるとともに本研究の主題について、共通認識の土臺づくりを試みた。例會にて取り上げられたテーマは、二〇世紀西洋思想における反家族主義・反家長制思想、中國の一人っ子政策の功罪、母子家庭扶助制度の歴史的變遷、家事労働をめぐるフェミニズム言説の再評價、皇族における「家族と愛」への社會學的アプローチ、生殖醫療がもたらす家族觀の變化とその限界、児童文學のなかの家族像、

二四條改憲案に集約される戦後日本の反動的家族主義の本性……と多岐にわたる。また、例會の内一回は國際シンポジウムを兼ね、海外から招聘した研究者とともに、トラウマ(とりわけ、家庭内での性暴力)の経験と記憶をめぐる諸問題について検討した。例會が回を増すにつれて、メンバー相互の理解が確實に深まり、初年度としては充實した議論が交わされた。

個人研究

東方學研究部

川西走廊の漢藏諸語の記述研究 池田 巧
 中國共產黨史の研究 石川禎浩
 イスラーム東漸史の研究 稲葉 穰
 東アジア佛教美術史の研究 稲本泰生
 佛教研究知識ベース——禪佛教を例として

WITTERN, Christian

古代中國の考古學研究 岡村秀典
 中國注釋學史研究 古勝隆一
 中央アジア東部の佛教文化 FORTE, Erika
 インド・中國における佛教の學術と實踐 船山 徹
 一〇〜十三世紀ユーラシア東方における王朝間關係の研究 古松崇志
 秦漢制度史の研究 宮宅 潔
 高麗官僚制度研究 矢木 毅
 文字コード理論 安岡孝一

- 六朝隋唐佛教史の研究 倉本尙徳
 中國繪畫史の研究 吳孟晉
 中國中世近世の文學理論 永田知之
 中國イスラームの研究 中西龍也
 上古中國語音韻史の研究 野原將揮
 東アジア傳統科學の研究 平岡隆二
 歴史考古學的方法にもとづく中國文化研究 向井佑介
 近代華南沿海の社會經濟制度の變容 村上衛
 東方學における對象の論理學的研究 白須裕之
 中國家具とその使用に関する研究 高井たかね
 二〇世紀臺灣農業經濟の變容と自治・自律 都留俊太郎
 中國古代中世の官制史 藤井律之
 東西資料によるモンゴル時代の文化交流と諸制度の研究 宮紀子
 文字定義情報に基づく文書表現系に関する研究 守岡知彦
 近世以降日本における中國の戯曲と小説の受容 楊維公
人文學研究部
 近世社會解體過程の研究 岩城卓二
 近代西洋音樂史 岡田暁生
 戦前期日本の工業化と華僑ネットワーク 籠谷直人
 イギリス・アイルランド近現代史 小關隆
 技術・自然・(ポスト)現代性の思想——哲學的探求 佐藤淳二
 近代天皇制の文化史的研究 高木博志

- 近代日本美術と西洋 高階繪里加
 人種・エスニシティ論 竹澤泰子
 精神分析的知の思想史的位置づけ 立木康介
 西アフリカと南アジアの宗教、憑依、間身體性 石井美保
 近代トランスコーカサス(特にグルジア)における匪賊 伊藤順二
 近代現代日本の社會史、思想史、技術史 KNAUDET, TILL
 近代現代日本の社會經濟と環境 小堀聰
 汚穢と非——秩序をめぐる日常現場の倫理 酒井朋子
 東アジアにおける生命科學と「自然」 瀬戸口明久
 〈非人間〉の歴史と記憶の存在論 直野章子
 近代現代日本の社會運動・社會思想 福家崇洋
 農業史の再構築 藤原辰史
 フランス象徴主義と文學的モデルニテ森本淳生 岡澤康浩
 共同的認識實踐の歴史 菊地暁
 近代日本民俗誌システムの研究 金智慧
 近代歌舞伎における懐古・改良意識および傳統劇化 藤野志織
 近代フランス文學・藝術における「遊戯」の再検討

事業概況

・Kyoto Lectures 2022

二〇二二年四月一三日

於 フランス國立極東學院京都支部 (EFEO)・
 イタリア國立東方學研究所 (ISEAS) (同時にZoomで配信)

De-Christianizing Nagasaki: Temples and Shrines in the Early Edo period
 講演者: Carla Tronu (關西外國語大學)

・Kyoto Lectures 2022

二〇二二年五月一六日

於 フランス國立極東學院京都支部 (EFEO)・
 イタリア國立東方學研究所 (ISEAS) (同時にZoomで配信)

Between Collective Security and "Old Diplomacy": Japanese-French Relations during the Manchurian Crisis, 1931-1933
 講演者: Seung-young Kim (關西外國語大學)

・人文研アカデミー二〇二二シンポジウム「ヴェリエ・ド・リラダンとフランス象徴主義——『殘酷物語』と『未來のイヴ』が現代に語りかけてくるもの」
 二〇二二年五月一六日

於 京都大學人文科學研究所本館大會議室 (同時にZoomで配信)

『殘酷物語』を読む——風刺と構成の美學
 田上龍也 (學習院大學文學部)

『未来のイヴ』と／における超越

木元 豊（武蔵大学人文学部）

コメンテーター 中筋 朋（京都大学）

大学院人間・環境学研究所、

福田裕大（近畿大学国際学部）

野田農（早稲田大学創造理工学部）、

司會 森本淳生

・人文研アカデミー二〇二二夏期公開講座「名作再讀いま讀んだらこんなに面白い一四」

二〇二二年七月二日

於 京都大学人文科学研究所本館大會議室（同

時にZoomで配信）

デカルト『方法敍説』を讀み直す——「私」と

「方法」 佐藤淳二

玄奘三藏の傳記を讀み直す——歸國後の行跡を中

心に 倉本尚徳

疚しさの澱、安岡章太郎短篇作品の魅力を探る

藤野志織

・人文研アカデミー二〇二二シンポジウム「東ア

ジアの脱植民地化とジェンダー秩序——女性たち

の経験と集会的記憶の再構築」

二〇二二年七月一日

於 京都大学人文科学研究所本館大會議室（同

時にZoomで配信）

開會挨拶 竹澤泰子

趣旨説明 蘭 信三（大和大学）

第一報告：「滿洲からの引揚げと性暴力被害——

被害者の名乗り出による集会的記憶の揺らぎ」

山本めゆ（立命館大学）

第二報告：「日ソ戦後の記憶とジェンダー…サハ
リンをめぐる残留と抑留」

中山大將（釧路公立大学）

第三報告：「濟州四・三の犠牲者と遺族…存在の

規定とジェンダー」伊地知紀子（大阪公立大学）

第四報告：「女性政治受難者の経験と記憶を讀み

解く——臺灣五〇年代白色テロルをめぐる

——」

コメンタリプライム総合討論 長志珠繪

・Kyoto Lectures 2022

二〇二二年七月一日

於 フランス国立極東學院京都支部 (EPEO)・

イタリア国立東方學研究所 (SEAS)（同

時にZoomで配信）

How Zen Became Japanese: The Daito Branch

and the Birth of a New Practice in Rinzaibudd-

hism

講演者：Didier Davin（國文學研究資料館）

・日佛共同研究出版記念シンポジウム「人種主義

と反人種主義の越境と轉換」

二〇二二年七月一日

於 キャンパスプラザ京都六階第五講習室（同

時にZoomで配信）

本書の趣旨

竹澤泰子、

ジャン＝フレデリック・シヨブ

（フランス国立社會科學高等研究院—TEPPS）

執筆者：太田博樹

（東京大学大学院理學系研究科）

長志珠繪、關口 寛（四國大學經營情報學部）、

竹澤泰子、ジャン＝フレデリック・シヨブ

評者：森千香子（同志社大学）、

安岡健一（大阪大学）、石井美保

・人文研アカデミー二〇二二合同合評會「實踐と

としての科學的認識：『客観性』ラボラトリー・ラ

イフ』を讀む」

二〇二二年七月二四日

於 京都大学人文科学研究所本館大會議室（同

時にZoomで配信）

開會挨拶 河村 賢（大阪大学社會技術

共創研究センター）

『ラボラトリー・ライフ』紹介

金 信行（東京大学大学院學際情報學府）

『客観性』紹介 瀬戸口明久

評者報告 前田泰樹（立教大学社會學部）、

鈴木 舞（東京電機大学未來科學部）、

金 凡性（東京理科大学教養教育研究院）

閉會挨拶 立石裕二（関西學院大学社會學部）

司會 岡澤康浩、森下 翔

（大阪大学社會技術共創研究センター）

・第三五回「東洋學へのコンピュータ利用」研究

セミナー

二〇二二年七月二九日

於 京都大学人文科学研究所本館セミナー室一

（同時にSkypeで配信）

低品質文字畫像を用いた高精細畫像からの字形自

動再切り出しの試み 守岡知彦

玉篇系字書の構造化記述に關するTEIマーク

アップについて 李 媛 (關西大學)
 青空文庫 DeBERTa モデルによる 國語研長單位
 係り受け解析 安岡孝一
 ・國際シンポジウム「近代日本・中國における章
 學誠研究熱の形成とそのインパクト——内藤湖南
 胡適および二〇世紀中國學の諸相——」
 二〇二二年七月三十一日 (Zoom で開催)
 戴震と章學誠と胡適——乾嘉への接續と學術史の
 文脈 竹元規人 (福岡教育大學教育學部)
 「章學誠轉向」與現代中國の史學實踐：胡適到餘
 英時 潘 光哲 (臺灣中央研究院近代史研究所)
 一九世紀中國の知識人が見た章學誠とその言説
 —— 史論家・思想家への道 —— 永田知之
 與内藤湖南同歩推崇章學誠的劉成炳和何炳松——
 章學在一九二〇年代成爲顯學的兩個年輕推手——
 陶 德民 (關西大學東西學術研究所)
 餘嘉錫の章學誠理解——繼承と批判 古勝隆一
 京都 Sinology 與近代湘學之間

劉 嶽兵 (中國南開大學日本研究院)
 内藤湖南と梁啓超の文德 (設身處地) について
 高木智見 (山口大學人文學部)
 ・フランス書簡體小説シンポジウム Les belles
 lettres dangereuses – Le destin de l'épistolarité
 littéraire du XVIIe au XIXe siècle
 二〇二二年八月二十八日・二十九日
 於 京都大學人文科學研究所本館四階大會議室
 La rhétorique épistolaire des passions dans les
 Lettres portugaises
 Katsuya Nagamori (京都大學)

Les Lettres persanes, ou les malheurs de la vertu
 selon Montesquieu Kenta Ohji (東京大學)
 * Ce n'est plus une lettre, c'est un livre *: La
 Religieuse de Diderot aux marges du genre
 épistolaire Raphaëlle Brin
 (École normale supérieure de Lyon)
 Esquisse du problème épistolaire chez Rétif de la
 Bretonne Atsuo Morimoto
 Le roman épistolaire et l'expérience de hauteur: à
 propos d'Oberman de Senancour
 Daisuke Kataoka (慶應義塾大學)

* Tu m'as trop menti *: poétique de la femme et
 de la franchise épistolaires chez Balzac
 Tomoko Hashimoto (千葉大學)
 La fiction épistolaire en France au XIXe siècle,
 déclin et expérimentations
 Claudie Bernard (ニวยอร์ก大學)
 ・レファレル・フロン講演會 Repenser les rela-
 tions économiques: La Nouvelle Héloïse de
 Rousseau
 二〇二二年九月二日
 於 京都大學人文科學研究所本館一階セミナー
 室一 講師 Raphaëlle Brin
 (École normale supérieure de Lyon)
 ・人文研アカデミー二〇二二『近現代中國研究の
 最前線：現代中國研究センター設立一五周年連続
 セミナー』
 於 京都大學人文科學研究所本館セミナー室一

または大會議室 (同時に Zoom で配信)
 二〇二二年九月八日 京大人文研の近現代中國研
 究の歴史
 小野寺史郎 (人間・環境學研究科准教授)
 二〇二二年九月一五日 中國經濟の特徴は何か
 —— 中國近代史から考える 村上 衛
 二〇二二年九月二二日 臺灣獨立とは何か——こ
 とはの歴史から考える 都留俊太郎
 二〇二二年九月二九日 毛澤東と田中角榮の會談
 —— 國交正常化五〇周年にあたって振り返る
 石川禎浩
 ・人文研アカデミー二〇二二オンライン連續セミ
 ナー

「草原と中華のあいだ——北方王朝 (遼・金・元)
 の興起とユーラシア東方」(オンライン開催)
 二〇二二年九月三〇日 天と祖先をまつる——
 遼・金・元の儀禮 古松崇志
 祭祀と王權
 二〇二二年十月七日 契丹 (遼)・金の社會と佛
 教 藤原崇人 (龍谷大學)
 二〇二二年十月一四日 金・元時代の都市と生活
 渡邊健哉 (大阪公立大學)
 二〇二二年十月二二日 モンゴル時代の記憶と祖
 先傳承 飯山知保 (早稲田大學)
 ・ Kyoto Lectures 2022
 二〇二二年十月一九日
 於 フランス國立極東學院京都支部 (EFEO)・
 イタリア國立東方學研究所 (ISEAS) (同
 時に Zoom で配信)

An Archaeology of Wealth and Poverty: Unexpected Sources of Medieval Japanese Economic Thought

講演者：Ethan Segal (ミシガン州立大学)
・国立大学附置研究所・センター会議第三部会
(人文・社会科学系) シンポジウム「感染症と近代社会——ポスト・パンデミックの人文文学にむく」

二〇二二年十月二八日 (オンライン開催)
開會挨拶 時任宣博 (京都大学理事・副学長)
ワクチン傳來と近世長崎・感染症、蘭学、近代化

『公衆』衛生の誕生——近代日本における傳染病とその啓蒙 香西豊子 (佛教大学教授)

コロナ・パンデミックの歴史的位置——スペイン風邪との比較から 藤原辰史

総合討論デイスカッショント：岩城卓二
閉會挨拶 稲葉 穰

・人文研アカデミー講演會ローラ・喜納のアートとトーク「ウチナンチュのルーツを辿って」
二〇二二年十月三〇日

於 沖縄県立博物館・美術館博物館講座室
講演：ローラ・キナ (米國トウポール大学)

コメント：喜納育江 (琉球大学)
国際地域創造学部)

司會 竹澤泰子
・人文研アカデミー二〇二二年オンラインセミナー
「大作曲家たちはどうやって名曲を作ったか」
二〇二二年十一月一日 (オンライン開催)

講師 浅井佑太 (お茶の水女子大学講師)、
岡田暁生

・Kyoto Lectures 2022
二〇二二年十一月一六日

於 フランス国立極東學院京都支部 (EFEO)・
イタリア国立東方學研究所 (ISEAS) (同
時にZoomで配信)

Ogyu Sorai's Political Theory Reconsidered:
What, and Why?

講演者：Olivier Ansart (パリ大学)
・シンポジウム「記憶の存在論と歴史の地平」
二〇二二年十二月三日 (オンライン開催)

開會挨拶 立木康介
趣旨説明 直野章子
基調講演 Through a Glass Darkly: Recollecting
Representing, and Interpreting the Past

Janice HAAGEN
(ポートランド州立大学名譽教授)

パネル討論
討論者：花田里歐子 (東京女子大学)、直野章子
司會 立木康介

全體討論
・人文研アカデミー二〇二二年シンポジウム「日本
古代中世の佛像彫刻——阿彌陀如來の變容をさぐる——」

二〇二二年十二月四日 (オンライン開催)
飛鳥奈良時代の阿彌陀造像 田中健一 (文化廳)

平安時代における阿彌陀の印相轉換
高橋早紀子 (愛知學院大学)

快慶研究最前線——阿彌陀如來像を中心に——
山口隆介 (奈良國立博物館)

総合討論
ファシリテーター 佐々木守俊 (清泉女子大学)

司會 稲本泰生
・特別講演會「ホージャ・ウバイドゥツラー・ア
フラールの傳記、言葉、逸話についての二次資料
と、『生命の泉からの滴り』の新しい校訂本に携
わった経験」

二〇二二年十二月九日 (オンライン開催)
講師 アーリフ・ナウシャヒー

(ゴードン・カレッジ元教授)
・人文研アカデミー二〇二二年オンラインシンポジ
ウム「山に生きる——なりわいと環境の歴史學」
二〇二二年十二月一〇日 (オンライン開催)

柳田國男以前のこと——日向國椎葉山に生きる
人々—— 武井弘一 (琉球大学)

「ゴミ」から「資源」を「拾う」——鑛山に生き
る人々—— 岩城卓二

司會+コメンテーター 藤原辰史
・分野横斷プラットフォーム・ワークショップ
『Past, present and future of Asian lacquer:
urushi from art to electronics』
二〇二二年十二月二日

於 京都大学學術研究支援棟セミナー室B1
(同時にZoomで配信)

開會挨拶、趣旨説明 Erika Forte
高臺寺時繪の復元 下出祐太郎 (京都産業大学)

ウルシの内樹皮および樹脂道の形成過程

二社谷祐司(京都大學農學部)

東アジアの出土漆器——考古學上の論點と異分野協働事例の報告 大谷育恵(白眉センター)
漆被膜の分子特性 Iliara Bonaduce (ピサ大學)
漆を用いた電子回路の開発、実証、應用 橋本悠希(筑波大學)

博物館コレクション内のアジア漆器・特性評價と保存における課題

Diego Tamburini (大英博物館)
有機ニューロモルフィックシステムの基礎
Victor Erokhin (バルマ大學)

閉會の言葉 中村正治(京都大學工學研究科)
峰尾恵人(京都大學農學研究科)

・ Kyoto Lectures 2022
二〇二二年十二月一四日(オンライン開催)

Doxographies of Empire: The Imperial Transformation of Japanese Buddhist Thought
講演者: Stephan Kiyensan Licha

(ハイデルベルク大學)
・フロラン・ゲナール講演會「戦争とは何か? ルノーによる國家とその紛争性」

二〇二三年一月一七日
於 京都大學人文科學研究所本館セミナー室一

講師 フロラン・ゲナール
(パリ東クレテヌ大學)

・ Kyoto Lectures 2023
二〇二三年一月二四日

於 フランス國立極東學院京都支部(EFEO)・
イタリア國立東方學研究所(ISEAS)(同時

(Zoomで配信)

The Politics of Flying Saucers in Yukio Mishima's Beautiful Star
講演者: Stephen Dodd (ロンドン大學)

・近現代天皇制を考える學術集會——「建國記念の日」に問う
二〇二三年二月一日

於 京都大學工學部総合研究四號館共通第一講義室

「建國記念」の近現代史 高木博志
天皇の代替わりと映畫 紙屋牧子(玉川大學)

「帝國日本」の學校儀式
樋浦郷子(國立歴史民俗博物館研究部)

昭和戦前期の君民間コミュニケーション——地方行幸時の「御下問」行為に注目して——
佐々木政文(京都先端科學大學人文學部)

「不敬」のプリズム——大川周明と「紀元二千六百年」 福家崇洋
ヨーロッパ史における君主政と共和政——王のさ

ない共和政を展望するために
小山 哲(京都大學大学院文學研究科)

・ Kyoto Lectures 2023
二〇二三年二月一三日

於 フランス國立極東學院京都支部(EFEO)・
イタリア國立東方學研究所(ISEAS)(同

時にZoomで配信)
Megoliths Everywhere: Prehistoric Japan as a

Showcase of Human Societies' Diversity
講演者: Laurent Nespoulous

(フランス國立東洋言語文化學院)

・「中世から近代の西アジア・イスラーム都市の構造に関する歴史學的研究」第三六回研究會(講演會)
二〇二三年二月一八日

於 (人文科學研究所)本館セミナー室四

Urban Structure and Urban Change in Seljuq Baghdad
Vanessa Van RENTTERGHEM

(フランス東洋言語文化學院)
Tehran at the Transition from the Qajars to the

Pahlavis: Modernization and the History of Everyday Life Anja PISTOR-HATAMI (キール大學)

・ Qajar Round Table: Urban Landscapes in Qajar Iran
二〇二三年二月二〇日

於 (人文科學研究所)本館四階大會議室
Opening Address 稲葉 穰

Opening Remarks 守川知子(東京大學)
Artisans and Handicrafts of 19th century Isfahan:

Legacy of Salavid Iran 守川知子(東京大學)
Women's Socio-economic position in the urban life

of Tehran during the Qajar period: A Case Study based on the Darfar-e-Shar'iyat of the Inman Jomeh

Khoe Susan ASILI (ロンドン大學)
Cities and Settlements in Iranian Makran at the

Turn of the 19th and 20th Centuries
小澤 一郎(立命館大學)

A Photo with Mirza 'Ali Asghar Khan Atabak in it, taken during his stay in Japan: Reconstructing

is Context 黒田 卓 (東北大学)

Urban Landscape of Iran as described in Masaharu Yoshida's Travelogue (1880-1881)

Hashem RAJABZADE (大阪大学)

Social Structures of the Tabrizi Urban Quarters in the Nasiri Era 岡部尚史 (お茶の水女子大学)
Landscapes of Constitutionalism in Tehran: The Capital and Its Parliament

Anja PISTOR-HATAMI (キール大学)

Between Cities and Villages: a Qasabe in Qatar Demography 近藤信彰 (東京外国語大学)

Closing Remarks 守川知子 (東京大学)

・田佛國際ハクシムイ: Les revies de Rétif de la Bretagne - Subjectivities, généalogies, mo-
rales

二〇二三年二月二日、二三日

於 京都大学人文科学研究所四階大會議室 (同
時にZoomで配信)

I. Identité(s) et fantasme autobiographique

Naissance d'un écrivain — *Le Pysyon perverti* et
la tradition littéraire comme espace des possibles
narratifs 森本淳生

Monsieur Nicolas ou l'« anatomie du moi humain »

Françoise Le Borgne

(クルルモン・オーベルニュ大学)

報 « Un livre vivant » et le fétichisme — Rétif chez

Blanchot 郷原佳以 (東京大学)

II. Morales: les limites de l'homme

彙 Déconstruire le mariage: Rétif entre Rousseau et

Sade 藤田尚志 (九州産業大学)

L'inquiétude, la morale et le bonheur dans *Les Nuits de Paris* 石田雄樹 (神戸大学)

III. Généalogies en question

Nerval et Rétif de La Bretagne: généalogie,
théâtralité et matériau onirique 辻川慶子 (白百合女子大学)

Malaise dans la filiation, ou comment relire Rétif
aujourd'hui Gisele Berkman (国際哲学コロージュ)

・第一八回京都大学人文科学研究所 TOKYO 漢
籍 SEMINAR 『漢籍の遙かな旅路』——日本へ
の旅路——』

二〇二三年三月六日

於 一橋大学一橋講堂中會議場
海を越えた韓書と漢籍 矢木 毅
行きて歸りし書物——漢籍の往還をめぐって——
永田知之

海西と海東の『王勃集』 道坂昭廣

(京都大学大学院人間・環境学研究科)

・京都大学人文科学研究所退職記念講演會

竹澤泰子教授退職記念講演會『人間の分類と差別
——人種をめぐる文化人類学的探究——』

二〇二三年三月一日

於 京都大学百年時計臺記念館二階国際交流
ホール (同時にZoomで配信)

コメンテータ: 齊藤綾子 (明治学院大学)

文学部教授、岩谷彩子

(京都大学人間・環境学研究科教授)

徳永 悠 (京都大学人間・
環境学研究科准教授)

司會 西郷南海子 (日本學術振興會
特別研究員PD)

岡村秀典教授退職記念講演會『古代中國人はどの
ちうに生きたか』

二〇二三年三月一六日

於 京都大学人文科学研究所本館共通一講義室
(同時にZoomで配信)

司會 向井佑介

・Kyoto Lectures 2023

二〇二三年三月一五日

於 フランス国立極東學院京都支部 (EFEO)・
イタリア国立東方學研究所 (ISEAS) (同
時にZoomで配信)

Reframing Japonisme: Women's Engagement
with Japanese Art in 19th-Century France

講演者: Elizabeth Emery
(モンクレア州立大学)

・国際ワークショップ「中國近代における經書の
受容と變容」

二〇二三年三月一九日

於 京都大学人文科学研究所分館・大會議室
(同時にZoomで配信)

發表者 陳 佑眞、竹元規人、

邱 惠芬、吉田 勉、金 培懿

所員動靜

招へい研究員

・林 立萍 臺灣大學日本語文學科教授
 外の視點から京ことばの特徴を考ふる

（文化連關研究客員部門） 受入教員 岩城教授
 期間 二〇二二年四月一日～二〇二二年九月三〇日

・YI Jidu フロリダ國際大學准教授

三～六世紀シルクロードの佛教傳播における宗教的實踐と儀禮

（文化生成研究客員部門）

受入教員 向井准教授
 期間 二〇二二年五月一日～二〇二二年七月三十一日

・馮 繼仁 ハワイ大學ヒロ校准教授

『營造法式』の文獻學研究

（文化生成研究客員部門） 受入教員 古松教授
 期間 二〇二二年七月六日～二〇二二年十月五日

・CHRISTY, Alan Scott カリフォルニア大學サンタクルーズ校准教授

八重山戦争マラリア・帝國主義、科學と記憶のポリテクス

（文化生成研究客員部門）

受入教員 直野准教授
 期間 二〇二二年十月一日～二〇二二年十二月三十一日

・張 曦 中央民族大學民俗學與社會學學院文化

人類學教授

自然災害と文化の繼承に關する中日比較研究
 （文化連關研究客員部門） 受入教員 池田教授
 期間 二〇二二年十月一日～二〇二二年十二月三十一日

招へい外國人學者

・HUBBARD, James Bert スミス大學教授
 中國・日本佛教文獻・佛教と腦科學に關する研究

（文化連關研究客員部門） 受入教員 Wihren 教授
 期間 二〇二二年十月一日～二〇二三年九月三〇日

・Duojeacandan 青海民族大學准教授

日本におけるチベット學と西域研究の展開
 ——宗教哲學と佛教文化を中心に——

受入教員 池田教授
 期間 二〇二二年二月一日～二〇二二年七月三十一日

・張 利軍 東北師範大學歷史文化學院副教授

夏商周國家構造の考古學研究
 受入教員 岡村教授
 期間 二〇二二年六月一日～二〇二三年四月三十一日

・高 婧聰 東北師範大學歷史文化學院副教授
 西周時代の國家構造とその歴史的影響

受入教員 岡村教授
 期間 二〇二二年六月一日～二〇二三年四月三十一日

・李 乃琦 中國浙江大學文學部准教授
 玄應「一切經音義」寫本文獻整理集成と言語研究

受入教員 岡村教授
 期間 二〇二二年六月一日～二〇二三年四月三十一日

受入教員 船山教授

期間 二〇二二年六月二〇日～二〇二三年一月二〇日

・YI Jidu フロリダ國際大學准教授
 三～六世紀シルクロードを介した佛教傳播についての美術考古學的研究

受入教員 向井准教授
 期間 二〇二二年八月一日～二〇二二年九月七日

・BEHR, Wolfgang
 上古中國語における放浪語

受入教員 野原准教授
 期間 二〇二二年九月一日～二〇二二年十二月三十一日

・李 皓 東北師範大學歷史文化學院副教授
 辛亥革命期の中國東北邊境政局に對する日本の對應

受入教員 石川教授
 期間 二〇二二年十月二四日～二〇二三年十月三十一日

・楊 奎松 華東師範大學中國當代史研究センター主任
 一九四九年以前の毛澤東の前半生とその思想についての考證

受入教員 石川教授
 期間 二〇二三年一月一日～二〇二三年十二月三十一日

・崔 善娥 明知大學校教授
 九世紀東アジアにおける佛教美術の研究

受入教員 稲本教授
 期間 二〇二三年一月三〇日～二〇二三年二月二十四日

・ KATA, Prachaitip カセサート大學講師

The living with deteriorated soil: The transfor-
native ethics in troubled naturecultural worlds

受入教員 酒井准教授

期間 二〇二三年三月二十五日～二〇二三年四月二
七日

外国人共同研究者

・ 易 丹韵 早稲田大學大学院文學研究科博士後
期課程

佛教学宇宙觀の中國的展開に關する研究——五
— 三世紀の「世界圖」制作を手掛かりに——

期間 二〇二二年五月六日～二〇二二年八月一七
日

・ 蔡 長廷 國立聯合大學通識教育中心兼任助理
教授

日本における征服王朝論の發展とその後

期間 二〇二二年三月八日～二〇二三年三月七日

・ 趙 一水 高麗大學民族文化研究院訪問學者
近世朝鮮及び清朝の政治的言説における日本

期間 二〇二二年四月六日～二〇二三年四月五日

・ 胡 頌 臺灣大學中國文學研究所博士候選人
南北朝時代における國家意識の構築とその表象

—— 外交使節・活動を中心に ——
受入教員 永田准教授

報
彙
期間 二〇二二年四月二二日～二〇二三年四月二
一日

・ Elia Weber ヘルリン自由大學修士課程

Indo-Iranian animal sacrifice (インド・イラン
の動物供犠)

期間 二〇二二年六月九日～二〇二二年八月一
日

・ Baoli Yang ブラウン大學 Ph. D. candidate

唐代佛敎とシルクロードの觀光文化

期間 二〇二二年七月四日～二〇二二年八月一日

・ 楊 翊 ハーバード大學博士後期課程
敘述史學から分析史學へ：唐宋時代の史學の轉
換

期間 二〇二二年八月二一日～二〇二三年八月二
〇日

・ BROWNING, Jason インディアナ大學ブルーム
ントン校博士課程

Early Medieval Central Asian Buddhist Philo-
sophy as Reflected in Early Japanese and
Islamic Scholastic Traditions: Examining the
Transmission of the Doctrine of Momentariness

期間 二〇二二年八月二二日～二〇二三年八月二
一日

・ 劉 素桂 蘭州大學外國語學院副教授

近代日本人による中國文化財調査

期間 二〇二二年十二月二日～二〇二三年十一月
三〇日

・ 郭 珮君
受入教員 向井准教授

日本中世の佛敎願文における神國と佛國

期間 二〇二三年二月一日～二〇二三年七月三十一
日

外国人研究生
・ 石垣 章子

漢譯佛典として位置付けられた疑偽經典の成立
と思想の系譜

期間 二〇一八年四月一日～二〇二四年三月三十一
日

・ Pelayo Prieto, Miguel Angel

和食前の日本料理。中世・近世日本料理への新
しいアプローチ。

期間 二〇二二年四月一日～二〇二三年三月三十一
日

・ Depaion, Philippe

Representations of Memories of Traumatic
Events in Contemporary Japan

期間 二〇二二年四月一日～二〇二三年九月三〇
日

・ 莊 帆
京都における羅振玉の生活と思想

期間 二〇二二年四月一日～二〇二三年七月三〇
日

・ 丁 麗瓊
感情史の視點から見る日中戦争時期の中國共產
黨新聞宣傳史の研究（一九三一—一九四五）

・ 郭 珮君

受入教員 石川教授

受入教員 石川教授
期間 二〇二二年五月一日～二〇二三年四月三〇日

・沈佳穎

海洋における帝國——日本帝國海洋主權の形成

受入教員 福家准教授
期間 二〇二二年六月一日～二〇二三年三月三十一日

・Nathaniel Lovdahl

唐と宋王朝の佛教受戒歴史

受入教員 船山教授
期間 二〇二二年六月一日～二〇二四年三月三十一日

・Kirill Kartashov

一八八〇～一九五〇年代日本における除蟲菊の歴史

受入教員 瀬戸口准教授
期間 二〇二二年六月一日～二〇二三年十一月三〇日

・申晴

清末以降の幣制改革 受入教員 村上准教授

期間 二〇二二年九月一日～二〇二三年八月九日

・黄蓉

唐・宋・西夏時代における漢、チベットの薬師佛圖像とその信仰に関する研究

受入教員 稲本教授
期間 二〇二二年十月一日～二〇二三年九月三〇日

・姜伊

日

漢唐時期における天象圖の變遷についての考古學的研究 受入教員 向井准教授
期間 二〇二二年十月一日～二〇二三年九月三〇日

・李瀾

唐代の石刻造像銘と中國佛教實踐 (Stone Inscriptions and Chinese Buddhist Practices in the Tang Dynasty)

受入教員 倉本准教授
期間 二〇二三年一月一日～二〇二四年三月三十一日

日

出版物

紀要

・人文學報 第一一九號(紀要第一九六冊)

二〇二二年 六月三〇日刊

・東方學報 九七冊(紀要第一九七冊)

二〇二二年 十二月二十五日刊

・人文學報 第一二〇號(紀要第一九八冊)

二〇二三年 二月二十八日刊

・ZINBUN number 53

二〇二三年 三月刊

研究報告その他

・センター研究年報二〇二二

二〇二三年 二月二十八日刊